

表紙 ある男の肖像

ロヒール・ファン・デル・ウェイデン画

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

も く じ

昭和54年度芸術祭演劇雑感……………茨木 憲	4
昭和54年度芸術祭テレビドラマを顧みて…江上照彦	6
国際化社会における日本語教育の課題……………水谷 修	8
呆け方……………円地文子	10
歴史的町並みの保存に学ぶもの ——京都の場合(下)——……………大西国太郎	12
フィリピン・韓国の著作権事情について…黒沢節男	14

文化庁ニュース

昭和54年度(第30回)芸術選奨決まる……………17	17
第19回県展選抜展……………18	18
森光子氏らに芸術祭大賞 昭和54年度芸術祭授賞式行わる……………19	19
第2回舞台芸術創作奨励特別賞決まる……………19	19
日本芸術院受賞者決まる……………19	19
移動芸術祭春季公演計画……………21	21
文化庁買上げ優秀美術作品……………22	22
重要有形民俗文化財の新指定 ——文化財保護審議会の答申——……………22	22
伝統芸能後継者募集……………23	23

祭礼歳時記シリーズ ①

祭りのいろいろ……………榎本由喜雄	24
-------------------	----

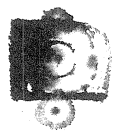
我が県の文化行政

安らぎのある生活空間を創造する 青森県の文化行政……………若松澄夫	26
--------------------------------------	----

著作権シリーズ(II)

著作権の制限——私的使用——……………29	29
国立劇場ニュース……………31	31

祭りのいろいろ



榎本 由喜雄

(文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化継主任文化財調査官)

我々がふとしたことで過去を振りかえったとき、まず心に浮かんでくるのは、幼・少年時の祭りの日のはれやかな一日である。普段着をぬぎすてて母親が特別に今日のために作った新調の衣服を着、すっかりきれいに整理され、掃除の行き届いた神棚の神神を拝礼する。その後、朝から祭りの日のために作られた赤飯をいただく。このようにしてはじまった祭りの日は一日中が特別な日で、神輿の御巡幸が家の前を通る度に急いで門を出て行く。神社に参拝し、帰りに露店をのぞいて、ちよつとしたものを買つ。今になって考えてみても、一年のうちで祭りの日はいちばん楽しい日であった。思えば一年のうちで祭りの日は特別の日であったのだ。その日一日は、家族一同が特別な生活をしたのである。

このような祭りは全国各地に古くからいろいろな姿で多種多様に伝承され、現在でも祭りを執行する土地に住む人々の協同体の団結の一つの中心となつ

ており、また祭りが長い間、人々の信仰の力によって支えられてきたので、祭りを見ることによって、信仰を中心とした日本人の基層文化を知ることができる。祭りの分類にはいろいろな方法があるが、これを季節によつて分類すると、春祭り・夏祭り・秋祭り・冬祭りの四つに大別することができる。このうちで説明の便宜上、夏祭りのみを後にして春祭り・秋祭り・冬祭りについて考えてみることにする。

わが国は古くから農業、特に米を作ることを重要視してきた。農家は耕田、種時き、……収穫と、一生懸命になって働いてきた。しかし、農業は労働だけでよい結果が得られるとはかぎらないのである。時によつては長い期間にわたって雨が降り続いたり、またこれとは反対に雨が少しも降らないで日照りばかりが毎日続いてすつかり土壌が乾燥したりして、天候の変化によつて耕作物が枯れてしまうことがある。また鳥や虫の害も忘れることができない。天候

の加減もよくすつかり穂ばらみした稲を見て、今年には豊作まがいなしと思つていたのに、いつとはなしに雀や蝗、うんかなどの鳥や虫に稲を襲われて、せつかくはらんだ穂をすつかりためにされてしまうということもしばしばであった。このため、つい最近まで、農業、特に稲の栽培は、種蒔きから収穫までの一か年間にわたって、賭をやっているようなものであった。そのため農家は一生懸命に働くとともに、神にその年の豊作を祈願し、感謝するのであった。これが春祭りであり、秋祭りであり、そして冬祭りである。

春祭りはまず家々・村々で年のはじめに、その年の田の収穫が豊年でありますようにとの祈願から、農事のもまねを主にして耕田から収穫まで模擬呪術が執り行われる。これにより神が呪術に感染し、その年を豊作にしてくれると考えられていた。これを「田遊」という。これがさらにその様式や規模を拡大して神道化したものが、神社で執行される「御田」「御田祭り」「田遊祭り」などである。しかし、先人たちはそれだけでは満足せず、さらに実際の田植えの際にも豊作を祈つて祭りが行われた。「お田植祭り」「御田植神事」「離し田」「花田植」などである。この春祭りの際にはその年の豊作を祈願するとともに、これを占うため年占行事が行われる。競馬・風揚げなどがある。また、わが国の古い信仰の一つに、山の神が春の農事のはじめに山から降りてこられて田の神となつて、その一か年の農事を守ってくれるということがある。この山の神が祖霊と考えられる

こともある。山や天から降られる神霊を神輿や山車に奉じて村々をまわるといふ春祭りも多い。

春祭りが豊作祈願の祭りであるのに対し、秋祭りは豊作に対する報恩感謝の祭りである。豊年祭りともいわれる。春祭りがもととも二月(旧暦)が四月(旧暦)であったのに対し、秋祭りは十一月(旧暦)であった。しかし現在では、秋祭りは十一月(旧暦)では気候も寒くなつていたので、多くは現在の九月か十月に執り行つてゐる。これは、もと秋祭りや冬祭りを執り行つてゐるための祭りがあつたのが独立して、現在の秋祭りになつたのではないだろうかと考えられている。このときには、神輿や山車を中心とした行列やいろいろな風流が各地で行われる。秋祭り・冬祭りは豊作に対する感謝と次の年の豊作祈願であるので、祭りとしても非常に重要視された。本来の秋祭りは収穫後約一か月ぐらゐのものの忌み生活に入り、きよい心身となつてはじめて行われた。このものの忌みの生活は嚴重なもので、これにより新しい強力な霊力が付着することとなる。この強力な霊力は枯死した稲の生命力を再生させ、来るべき年の豊作のもととなる。これが冬祭りである。もとともと秋祭りと冬祭りとは連続していたものであるが、後世になつて秋祭りが前述のように時期がはやくなり、冬祭りが「霜月祭り」などの名称で伝承されるようになつて、秋祭りと冬祭りが分離した。

夏祭りは春祭り・秋祭り・冬祭りとはまったく相違している。夏祭りは、もととも都会地において夏になると長い期間にわたり雨が降つて川が氾濫し町

中に大水が出て死傷者が出たり、また、水がひいた後に伝染病が蔓延し死者が続出したたりする、そんなとき昔は不遇で死んでいった人々の怨霊がたたりをするのだと考え、その怨霊を「御霊」と呼んで恐れ、この御霊を払う強力な神として八坂(祇園)・北野(天神)・石清水(八幡)の神々が信仰された。この祭りには美しい派手な風流の長い行列が、神輿・山鉾・山車・だんじりなどを中心として、にぎやかな笛・太鼓などの囃子につれて市街を練つて行く。こうして悪霊を他所に追いやってしまふのである。この祭りは、京都市の八坂神社の祇園祭り、愛知県津島市の津島神社の津島天王祭りなどが古来著名であるが、時代の推移とともに地方にもこの信仰が伝播し、この種の夏祭りは全国的に分布している。

以上、祭りを季節により四大別して、春祭り・夏祭り・秋祭り・冬祭りとしたが、これはあくまでも大別であつて、これに入らない祭りも多々ある。



1980-5

No. 140

表紙 ソドムを去るロトとその家族
ペーテル・パウル・ルーベンス画
解説は30ページ
題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

も く じ

さまざまな誤解 ——棟方志功の場合——	長部日出雄	4
冒険	清水邦夫	6
ヨーロッパ5か国をめぐる ——地方文化行政指導者海外派遣報告—— 森田秀策・中力 昭	昭	8
インドシナ難民と日本語教育 ——大和定住促進センターの 日本語教育を担当して——	西尾珪子	12
文化庁ニュース		
昭和55年度子ども芸術劇場実施計画		14
昭和55年度青少年芸術劇場実施計画		15
著作権審議会第30回総会開催		17
昭和54年度使用教科書等掲載補償金額決まる		17
重要文化財(建造物)の新指定 ——文化財保護審議会の答申——		17
重要伝統的建造物群保存地区の新選定		19
重要無形文化財の指定と認定		19
文化財選定保存技術の選定と認定		20
史跡の指定等 ——文化財保護審議会の答申——		22
昭和55年度著作権講習会等の開催		22
〈新設法人紹介〉 財団法人日本食生活文化財団		23
祭礼歳時記シリーズ ②		
6月の祭り	榎本由喜雄	24
我が県の文化行政 広島県の文化行政30年を省みて	斉藤清三	26
著作権シリーズ(12) 著作権の制限——図書館等における複製——		29
国立劇場ニュース		31

六月の祭り



榎本 由喜雄

（文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化課主任文化財調査官）

六月にもいろいろな「祭り」が行われる。六月といっても、今の暦——太陽暦——の六月ばかりでなく、今ではあまり使われていない旧暦——太陰暦——の四月・五月のいくにちかが祭りの日であるので、これを新暦に換算して、ちょうど六月のいくにちかに相当するので、この六月のいくにちかに祭りをを行う所もある。また、もとは旧暦の五月のいくにちに祭りをしていたが、旧暦が新暦にか変わったので、祭りの執行日である旧暦の五月のいくにちを——一か月延ばして、新暦の六月のいくにちにした所もある。このため、現在ただ六月に祭りが行われているからといって、祭りの日がいろいろに変遷してきているのである。

六月の祭りといえば、四月号の「祭りのいろいろ」の中の「夏祭り」で記した、もと民俗行事であった川祭りや中世に御霊信仰と結びついた祇園会や天王祭りを思い浮かべるが、この祭りは現在では多く新暦の七月に執行されている。このためその詳細については次号でのべることしたい。

六月といえば梅雨である。約一か月の長期間にわたって、雨が降ったり、やんだりするという陰気

な毎日が続いていく。都会の人にとっては不快な一か月であるが、ひと昔前までは、この天候は農家にとっては、なくてはならないものであったのである。今でこそ農機具・肥料・農薬などが進歩したので田植えは五月頃から始められるが、以前はこの梅雨の時期を利用して田植えが行われた。

もと、田植えは村の共同作業であり、田植えの指揮者は田の神祭りの司祭者であり、また、田植えをする村人を協同させる血縁的な関係の中心的人物でもあったのであって、田植えがただ単に稲の苗を田に植えるということではなくて、田の神を祭り、その豊作を祈願して稲の苗を植えていく。稲の鎮魂を行っている祭りである。現在では田植えはいろいろと改められているが、それでもこれらの中には非常に古風をとどめている田植えを見ることができる。

広島県・島根県の山間部を中心として、いわゆる中国山脈の南北の地方では古くから花田植・畦し田などと呼ばれる田植祭りが行われている。このような田植えは、すでに平安時代から京都近くで見られ、わが国の田植行事として古くから行われていたことで、中世に入って中国地方でも一般に行われていた

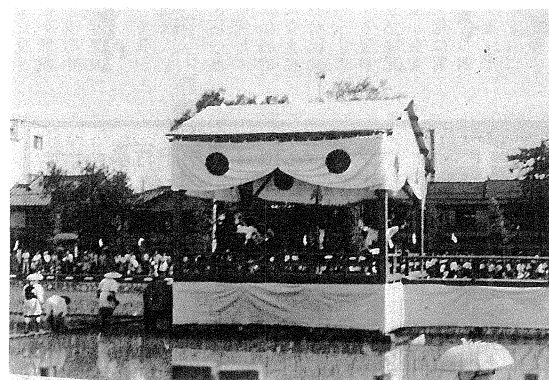
は五月二十八日）に執行されるお田植神事は著名である。神功皇后が長門の国（現在の山口県）から植女を召して御供田を植えさせたのが始まりといわれている。もと堺市乳守の遊女が奉仕したが現在は大阪新町の芸妓がこれにかわっている。修祓、祭典、植女が神前から早苗を受け、諸役と行列で神田に練り込む。神田では飾鞍に綿花をつけた牛が代掻きを行い、神職が田の清め敷いをする。行列が練り込んで来て田の周りを一周、ついで田の中央に張り出した仮舞台（幅三尺七寸、長さ八間の橋懸りの先に、三間四方の舞台）の上で、植女と下植女が相対して早苗の受け渡しを行い、ただちに田植えを始める。その間、舞台では八乙女による田舞がある。また御稔女による神田代舞が行われ、ついで風流武者が紅白に分かれて陣鐘、太鼓、法螺貝を鳴らしながら六尺棒を打ち合う棒打ち合戦がある。続いて住吉踊り、植女踊りがある。最後に日本舞踊（花柳流）が奉納されて行事が終る。



植女踊り（最近の作）を踊る。はやし手と早乙女が行列して本田の隣の苗代田に道行をする。胴はやしが曲を演奏し、早乙女が田植唄をうたう。代掻きのすんだ田では「くわじろ（えぶり）」が使われ、道行を終えた早乙女が苗代田に入り、苗取り唄により、苗取りが行われる。本田の——か所に祭壇が設けられ、田植えの神事が執行される。はやし頭取によって神迎への唄がはやされ、続いて三把の苗を三人の未婚の早乙女が神前に供える。祝詞、玉串奉典の後、三人の早乙女が神前の三把の苗をいいただき、早乙女頭にわたす。早乙女頭は三把の苗を早乙女全員にくばり、注連縄をくぐり本田に——列横隊となる。早乙女の列の中央後方に三人の早乙女頭、その後方に小太鼓・鉦・笛・胴はやしが二列横隊に位置し、また、はやし頭取が早乙女の前中央にいて、田植えの総指揮をとる。いよいよ田植えが始まる。はやし頭取は「まず三押の、お宮入りの楽打ちは」と上歌をうたうと、はやし手の胴はやしが始まり、早乙女は下歌「七福神がなざるの」とはやしの調子に合わせて田を植え始める。この地方では田植唄は約二千首もあり、日の出前、日の出から始まり、神送り、別れの歌、お礼の歌で終わっている。田植えが一切終了すると、この田植えのすべての関係者が田植宿に集まり、後始末をし、これで終わる。

このような田植祭りには、広島県では山県郡大朝町新庄のはやし田、高田郡美土里町桑田の桑田のはやし田、同生田の生田のはやし田、同本郷の本郷のはやし田、神石郡豊松村の供養田植え、比婆郡比和町の大山供養田植え、比婆郡比和町の供養田植えなどがあり、また島根県那賀郡三隅町黒沢の黒沢畦子田、山口県阿武郡須佐町の上三原の田植ばやし（以上いずれも県指定）などがある。

このような民俗行事としての田植祭りが神社の神事として執行されているものも多い。なかでも大阪市住吉区に鎮座する住吉大社で六月十四日（ふるく



住吉踊り
（住吉大社のお田植神事で、田植えが進むとともに舞台上で踊られる。）

らしい。このときにうたわれる田植唄は、中世の民衆の歌謡として国文学的にも注目されている。広島県高田郡高宮町原田に伝承される「原田はやし田」も古風をよく伝承する田植行事で、牛の神事、代掻き、札押と手踊り、道行、苗取りとくわじろ、田植えの神事、田植え、終わりの行事の順で行われる。みごとに飾られた牛を控える場所に集め、牛の安全のため神職から祝つてもらう。御幣と神酒をいただき、牛は本田へと向かう。本田の入口の注連縄をくぐり、一番牛を先頭に田に入る。牛は道具をまったく使用しないで二十頭、三十頭と行列で泥を踏んで、くだいていく。牛の代掻きの間、胴はやしと早乙女は田植えの正装で原田八幡神社の神前で豊作を祈り、田



1980-6

No.141

表紙 ジャ・ド・ブッフアの跳め

ポール・セザンヌ画

解説は22ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

音楽における早教育

——「こども芸術劇場」に関連して——丹羽正明 4

〔報告〕

動的映像の保護保存に関する勧告

政府専門家会議に出席して……………伊藤延男 7

特別展「国分寺」……………稲垣晋也 9

文化庁ニュース

昭和55年春の褒章受章者決まる……………11

昭和55年春の勲章受章者決まる……………11

文化振興会議の開催……………12

第4回全国高等学校総合文化祭の開催……………12

文化庁優秀映画並びにこども向けテレビ用
優秀映画製作奨励金交付作品決まる……………13

昭和55年度舞台芸術創作作品募集について……………14

昭和55年度芸術家国内研修員決まる……………15

重要文化財（美術工芸品）の指定
——文化財保護審議会の答申——……………15

重要文化財・霊台橋の修理終わる……………17

適塾——旧緒方洪庵住宅の保存修理終わる……………18

〈新設法人紹介〉
社団法人華道末生流……………18

文化庁企画・提供「美をもとめて」7月の放送予定……………19

〔資料〕

昭和54年度民間芸術等振興費

補助金の交付状況について……………20

祭礼歳時記シリーズ ③

7月の祭り……………榎本由喜雄 23

我が県の文化行政

県民文化の振興をめざして

——新潟県の文化行政——……………南 義昌 25

著作権シリーズ(13)

著作権の制限——引用——……………28

文化庁日誌……………30

国立劇場ニュース……………31

七月の祭り



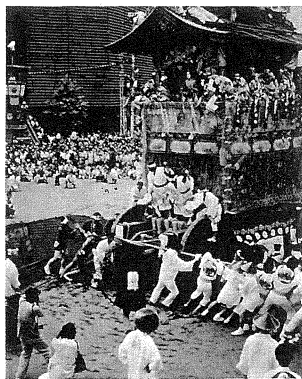
榎本 由喜雄

（文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化課主任文化財調査官）

現在の暦で七月といえば、いわゆる旧暦の六月頃にあたる。梅雨と、いよいよ猛暑に入る時期である。雨が降ったりやんだりする。天候のかげんでは急に大雨が降る。この雨により、河川は次第に水量を増し、河の水は力を得て、堤防を決壊し、市街へと突進していく。都市はすっかり水浸しとなる。数日を経てやつと水は引きはじめるが、家屋・家財道具は水に浸されてまったく使用できなくなってしまう。夏の晴天の強烈な太陽の下で乾燥させる以外に方法がない。このようなことに多忙な毎日をするようになって、疲労と湿気と暑気とから発病する者がつぎつぎとあらわれる。医学的にいえば伝染病の発生である。多くの人が死んでいく。このようなことが平安時代の初期頃から、京都の市街に見られるようになった。

しかし、昔の人々はどうしてこのような現象がおきて、多くの人が死んでいくのか、科学的に説明することができなかった。ただ、これを強力な霊力

を持つ神のたたりと考えた。それは神道では『古事記』や『日本書紀』に登場する神——素盞鳴尊——、仏教では外来の行役神——牛頭天王——のたたりによって上述の災害が発生すると考えた。いうまでもなく素盞鳴尊は強い力を持ち、泣くと山々の木々を枯れ木にしたり、暴風雨を呼んだりするという、人に畏れられていた神である。また牛頭天王は疫鬼を従えて、強大な力を持ち、人々に疫病をもまき散らすという、これまた恐ろしい仏教の守護神である。このような信仰と、たまたま政情の不安から政治事件に連座して誅せられていき、怨みをのんで死んでいった人々が、怨罪による死を怨んで心がおちつくことができず、怒ってたたりをしようと考えられていた。時の経過とともに、これらが御霊信仰という考え方で次第に統合されてきた。御霊信仰による祭礼の典型的なものとして、京都市の祇園祭りや愛知県津島市の津島祭りがある。



京都祇園祭りの山鉾行事
（重要無形民俗文化財）

祭りで、またの名を「祇園会」「祇園御霊会」「天王祭り」ともいい、毎年七月十四・十五・十六日の三夜を宵山といい、十七日が山鉾の巡行で、二十四日が還幸祭りである。

この祭りの由来をたずねると、『祇園本縁録』に次のようなことが書かれている。清和天皇の貞観十一年（八六九）に、京都の町々に疫病が蔓延し、多くの人が死んでいった。これはいかなるわけかと卜部日良麻呂に占わせたところ、このように疫病がはやるのは荒ぶる霊のたたりであるとし、この荒ぶる霊を鎮めるため、六月七日に、長さ二丈（約六メートル）の鉾を数多く立て、また同日の十四日には、京都の町々の男子や近郊の農家の男子が神輿を奉じて神泉苑へ送ったのが、この祇園祭りのはじまりであると書いている。

その後は、円融天皇の天禄元年（九七〇）より、毎年六月十四日にこの祭りが執行されるようになった。しかし保元・平治の乱や、応仁・文明の乱などで祭りを執り行うことができないこともあったが、明応九年（一五〇〇）六月に再興され、その後は京

都の町衆の手によって祭りの外観・内容ともに豪華絢爛となっていた。

祭りは七月一日の「吉付入り」ではじまり、十七日の山鉦巡行の順番をくじによって決定する「くじ取り式」が同二日に行われる。十日は「お迎え提灯」で夕方から東洞院蛸薬師から、提灯を持って八坂神社へ神輿を迎えるために参る。神輿は四条大橋の川原までかつがれ、ここで神輿洗いが行われる。十日・十一日は「鉦立て」、十三日は「稚児社参」で長刀鉦にのる稚児が八坂神社に参拝し、五位の位をもらう。十三日から十六日までが「宵山」で、各山鉦で祇園囃子が奏される。十七日は「山鉦巡行」「神輿渡御」、二十四日は「花傘巡行」「神輿還御」、二十八日は十日と同じように「神輿洗い」などの主要な行事があとで終了する。

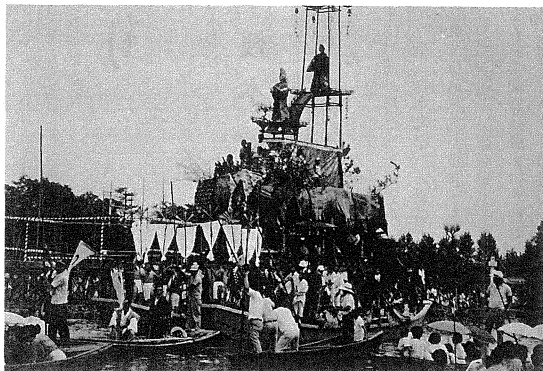
鉦や山は長刀鉦、函谷鉦、菊水鉦、月鉦、鶏鉦、放下鉦、岩戸山、船鉦、山伏山、孟宗山、太子山、郭巨山、保昌山、油天神山、伯牙山、木賊山、霞天神山、白樂天山、芦刈山、占出山、北観音山、南観音山、橋弁慶山、役行者山、鯉山、八幡山、鈴鹿山、黒主山、浄妙山の二十九台で、各山鉦では祇園囃子が笛・鉦・太鼓によって演奏されるが、それぞれ独特な旋律である。

京都の祇園祭りが市街の祭りであるのに対し、愛知県の津島祭りは川の祭りである。津島祭りは愛知県津島市の津島神社の祭りで、またの名を「津島川祭り」とか「提灯祭り」「尾張津島の天王祭り」などともいう。もとは旧暦六月十四日に宵祭りを、同十五日に朝祭りを執行してきたが、昭和三十八年から太陽暦（現在の暦日）の七月第四土曜日及び翌日の

日曜日に祭りが執り行われるようになった。

津島祭りは昔から著名で、はるか遠方の長野県の山間部の祭りの唱えことばの中にも津島祭りのことや津島神社の神についてのことが出てくるほどで、中世に津島信仰が各地に伝えられた際に流動していったのであろう。狂言の「千鳥」にも津島祭りを見物に行くことが出てくる。このため、近世に入ると「尾張名所図絵」「東海道名所図絵」「張州雑志」などに津島祭りのようすが美しい絵画や優れた文章であらわされている。

祭りは「神葎の神事」に用いる新しい神葎を刈り取る場所の選定からはじまり、祭りが終わるまで約



尾張津島天王祭りの車楽船行事
（重要無形民俗文化財）

三か月かかる。旧暦の六月の祭りとして、その大略をのべると次のとおりである。六月一日に神職により神葎の刈り場を選定するとともに、祭りに奉仕する各町と市江區で境目に斎竹を二本ずつ立て、奉仕の役割を神前で奉告し、車楽船に飾る人形の番組を能の曲目の中から選定して神社に知らせる。同十一日の未明に「神葎刈り」が行われる。また「船分け」といって車楽船を抽選で分配し、各町ではこれを二艘合わせて、その上に車楽屋形をのせる。十三日には神着用の「車屋」に守られた稚児が五人盛装して神社に参拝する。十四日は神幸式で、神輿が天王川の北の堤に渡御し、宵祭りが執行される。宵祭りは、車楽船の上に三百六十五個の提灯を傘鉦形にかけならべたものと、十二個の提灯を縦に並べ鉦をつけ高欄にも三十個の提灯を連ねた五艘の豪華な船が、津島笛を奏しつつ、北の堤のお旅所に神幸する。宵祭りが終わると、五艘の船は当番車の合図で競って朝祭りの車楽へと飾りなおす。明日の十五日は朝祭りで、旧市江村（海部郡弥富町）から出る市江車を先頭に、能装束を着した能人形を飾った車楽船五艘がお旅所に上ってくる。近づくや市江車に乗った若者が鉦を持って川に飛び込み、泳いで着岸し、お旅所の神輿を参拝し、神社の石橋に新しく張られた注連縄を切る。つづいて着岸した五艘の車楽船から稚児が下り、お旅所に参拝し、祭典の後、神輿に供奉し、神社の拝殿で津島笛に合わせて太鼓を打つ。十六日の早朝、「神葎流し」の神事が行われ、十七日に神葎の着岸した地を調べ、「神葎祭り」が執行され、二か月後に「神葎納め」の儀が行われて津島祭りは終了する。



1980-7

No.142

表紙 鏡の前の青いドレス

アンリ・マティス画

解説は21ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

も く じ

邦楽の保存の問題……………吉川英史 4

文化財建造物の修理と規矩術……………上田虎介 6

〔報告〕

インカ、マヤの遺跡のなかで飛鳥の石造物に逢う
——昭和54年度文部省在外研究員雑記——
……………猪熊兼勝 8

〔随想〕

美術館雑感……………内山 正 11

文化庁ニュース

昭和55年度文化庁派遣芸術家在外研修員を決定
——日本画家・松井和弘氏ら33名—— ……13

昭和55年度(第35回)芸術祭の開催計画決まる ……15

日本芸術院部長選挙について……………18

昭和55年度都道府県宗教法人
事務主管課長会議開催さる……………19

昭和55年度宗教法人実務研修会の開催……………19

昭和55年度包括宗教法人等
管理者研究協議会の開催 ……20

公益信託小山富士夫記念賞基金の設定について……………20

〈新設法人紹介〉
社団法人東池坊 ……20

文化庁企画・提供「美をもとめて」8月の放送予定……………21

祭礼歳時記シリーズ ④

8月の祭り……………榎本由喜雄 22

我が県の文化行政

格差の是正を図る沖縄県の文化行政……………上間正恒 24

海外文化行政事情シリーズ ①〔CDI報告書から〕

アメリカ文化行政の背景……………松野 精 27

著作権シリーズ(14)

著作権の制限——教育目的のための利用——……………29

国立劇場ニュース……………31

八月の祭り



榎本 由喜雄

(文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化調査主任文化財調査員)

八月は「日本民族大移動の月」と新聞・テレビ・雑誌などでよくいわれる。夏休みに家族一同揃って大都會を離れ、海や山へ出掛けるからではない。故郷を離れて都会に出、毎日を一所懸命に働いている人々は、八月には故郷に帰り、数日を故郷ですこし再び都会に戻り、自分の仕事に専念する。このようなことが、毎年八月にはくりかえされているのである。こういう帰省客で故郷に帰る列車・航空機・バスは満席となり、主要幹線道路はこれらの人々の自動車や数珠つなぎに続き、その車で渋滞するばかりである。故郷の家についた頃には、家族一同疲労困憊してしまう。こんなにしてまで人々はこうして八月に故郷に帰ろうとするのであろうか。

八月といっても、故郷が帰省客でにぎわうのは八月十三日・十四日・十五日・十六日ぐらいである。なぜこうなのであろうかといえば、ちょうどこの日が、いわゆる「月おくれのお盆」だからである。旧暦で古くから執り行われてきた七月十三日・十四日・十五日(場所によっては七月十六日も入る)の「お盆の行事」が新暦の七月の同じ日に行われるようになり、さらに、これを一か月遅らせて、新暦の八

月の十三日・十四日・十五日(・十六日)に執り行うようになった。このために人々はなんとしてでも故郷に帰ろうとするのである。

「お盆」とは何だろうか。もちろん、「お盆」ということは仏教関係の語で、仏教の「Ulamana」のこと、その発音を漢字で表記して、盂蘭盆と書き、「うらばん」とわが国ではいい、略して盂蘭盆の最後の一字だけをとって「盆」「お盆」などと称している。

「Ulamana」は倒懸の意味で、死後に餓鬼の中に落ちた亡者の倒懸の苦を救う法を仏に請うた仏弟子の目連は、仏より次のように教えられた。それは七月十五日に百味の飲食で衆僧を供養すれば、七世の父母さらには現在の自分の父母もあった。その苦しみから救うことができるということであった。この師の教えを実際に行うことによって、苦しみから父母を救うことができたといわれる。わが国で、この仏教式の盂蘭盆会が公に行われるようになったのは古く、推古天皇の十四年(六〇六年)、齊明天皇の三年(六五七年)などには、行われた記録がある。

ひるがえって、わが国の古くからの信仰に、春のはじめと秋のはじめの満月の日に、人々の祖先が子

わけて あれは 冥途と婆婆の
イヤ ヨーホエ ヨーホエ ヨイヤネー

賽の河原で

エー サンヨホホ ハアドッコイ ドッコイ

とどめたアンアアアアアアアア

ソラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤネ

コレ ニつや三つや四つ五つ ウオーイナ

ハア 十よりうちの みどり子なるが

ソラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナ

朝の日の出に 手をとりかわし

ハ ソレサエ

人も通わぬ 野原へ出でて

ソラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナ

とあり、「石童丸」や「七回忌」でも、「賽の河原」と同じように仏教の教えをわかりやすく教えるような説教的な所が多い。

しかし、江戸時代の中期頃になると、このような仏教的色彩の濃い歌詞だけでは踊りにくくなったのであろうか、次第に信仰的な味のある歌詞ばかりでなく、もつと娯楽性のある歌詞を求めるようになった。当時は人形浄瑠璃や歌舞伎が庶民の娯楽であったので、これらの影響を受けた歌詞により踊られるようになった。「お夏清十郎」「おさん茂兵衛」「丹波与作」「那須の与一」「揚巻助六」「お半長右衛門」などがその一例である。「お夏清十郎」の歌詞を記すと次のとおりである。

「末は怨めし、姫路の里の、お夏清十郎なき物語、嘘じやござらぬ、それほまの、その名かくれも但馬屋とゆて、国で一番頼ききの間屋、うちの娘にお夏というて、恋と情の道一筋に、迷う男はだんなのかわり、何につけても清十郎というて、人の好く風、恋風吹くも、色は三月小桜色で、歩むとりなり青柳腰、ことに背笠くけ紐つけて、向う通るは清十郎でないか、笠がよく似た背笠が、

孫のもとに來臨し、祝福をしてくれるので、これらの祖先の人々を祭るといことがあ。いわゆる固有信仰による祖先祭りである。この祖先祭りのうち春のはじめの祭りが正月の祭りとなり、秋のはじめの祭りに仏教の盂蘭盆が重なり、今日の「盆行事」となった。このため盆行事の表面にあらわれている仏教色を拭い去ると、わが国固有の民俗信仰による祖先祭りの姿はつきりと示してくるのである。

この盂蘭盆の期間に寺の境内・村の広場・道路・辻などで、家々を訪れた死んだ人々の霊を慰め、再びあの世に送りかえすために、老若男女の人々がこぞって踊る踊りが盆踊りである。もともと盆踊りは、ただおもしろいから踊るというのではなく、死霊を慰め、これをあの世に送りかえすというために踊るもので、この目的のための祭りを執行しているのが盆踊りであるといえるのである。その意味で「八月の祭り」として盆踊りをとりあげた。

日本人は死んだ人の霊に対し二つの相反する観念を持っている。その一は、死んだ人に対し死んだ人の生前のときと同じように親しみをもち、さらには尊敬の念を持つのであるが、また他の一面では、死んだ人に恐怖を感じ、あまり接近したくない。できればなるべく早く遠くへ行ってしまうといたいと思う。これは多分、死のけがれに対するおそれからであろうと思われる。このために盆踊りが死霊を慰めるためとともに死霊を送りかえすためという二面があるのである。

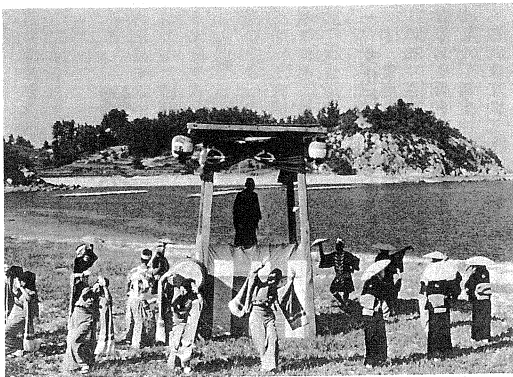
岡山県笠岡市白石島は瀬戸内海に位置する島で、ここでは八月十三日から同十六日まで、盆踊りが踊られ、他に十七日が観音踊り、二十一日が大師踊り、二十四日が地藏踊り、三十日が八朔踊りと名づけられ、徹夜で踊られ、新仏があればその家の前でも踊られる。この踊りを総称して「白石踊り」という。この盆踊りは、もともと源平の水島合戦で討ち死に

紐をくけしは、かのお夏女郎、いつぞいづと折々首尾を、つけてまわして……(以下略)

歌詞はいかにも娯楽的であるが、最後には人の会者定離、生者必滅の教えを汲みとることができから、やはり仏教の色彩はいくどなく感じることができ。このように信仰に発した盆踊りは時の経過とともに次第に娯楽性を増し、現在ではどちらかといえば、信仰的な意味のある盆踊りが減少しつつあるといえるほどで、娯楽性の盆踊りのみがかたに好まれるようである。

長野県下伊那郡阿南町新野では、毎年八月十四日・十五日・十六日の三夜、町の市神様前の道を踊り庭にして中央に櫓を立て、それを中心に踊り子が東西に長い円陣を作り、音頭取りの歌に合わせて踊る盆踊りがある。「おさま」「おやま」「音頭」「すくいさ」「高い山」「十六」「能登」の七種の踊りがあるが、「能登」だけは十七日の朝の「踊り神送りの式」を行う時にのみ踊り、それ以外では踊らない。

「踊り神送りの式」とは八月十七日の早朝、新盆の家から出された切子燈籠を先頭に、鉦と太鼓で囃して、古老の一行は市神様と太子堂の前で和讃を唱え、太子堂の前で鉄砲を打つ。踊りの庭では「能登」が踊られている。一行が踊りの庭に到着すると、踊りをやめ、一同が合体し、村境まで行き、ここで古老や神職により「踊り神送りの式」が行われる。切子燈籠を刀で切り、これに点火して焼き払い、再び発砲する。これで式が終了し、古老と音頭取りのみが秋歌を後に、村人たちは絶対に後ろを振り向かず、急いで各自の家に帰る。この盆踊りは盆以外には踊らないことになっている。この「踊り神送りの式」は明らかに死霊を恐れて、盆が終わるとともに急いで村境まで死霊を送ってしまうという古来の考え方をよく示している貴重な一例である。



白石 踊り

した人々の霊をうつため建立した水護霊神社で、慰霊のために踊られたのがそのはじまりとのことである。踊りは大傘の下で音頭取りが太鼓の音につれて歌う「賽の河原」「石童丸」「七回忌」など、非常に仏教的色彩の濃厚な歌詞によって、男踊り・女踊り・奴踊り・娘踊りがくり広げられる。

「賽の河原」の歌詞を見ると、
「イヤ ドンドサマー ドンドサマ サーヨイヤ
テ許させたまえ
イヤ ヨーホエ ヨーホエ ヨイヤネ
アソレ世の中の ア ソレセ
定め難きは 無常の嵐
イヤ ヨーホエ ヨーホエ ヨイヤネ
散りて先立つ 習いといえど



1980-8

No.143

表紙 コンポジション

ピエト・モンドリアン画

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

も く じ

彼岸へ赴く夕日に ——一つの視座からみた遺跡——	水野正好	4
「鑑真大師像回国巡展」随記	嵯塚泰光	7
〔報告〕 ヨーロッパの新しい劇場 ——英国国立劇場に我が国の 第二国立劇場(仮称)の計画を重ねつつ——	吉井澄雄	10
〔随想〕 歌舞伎の改革	福原匡彦	12
大衆芸能の系譜	田中英機	14
文化庁ニュース		
国立美術館所蔵内外美術名品展の開催について		16
「ポンピドゥ・センター／20世紀の美術」		16
エーゲ海キュクラデス諸島出土 「ギリシャ美術の源流」展 ——グーランドリス・コレクションから——		17
「現代ガラスの美——ヨーロッパと日本——」		18
第4回日本民謡まつりの開催		19
昭和55年度国語問題研究協議会の開催		20
第10回移動芸術祭秋季公演、9月から全国各地で		20
祭礼歳時記シリーズ ⑤		
9月の祭り	天野 武	24
海外文化行政事情シリーズ ② 〔C D I 報告書から〕		
全米芸術・人文科学財団	松野 精	26
著作権シリーズ(15)		
著作権の制限——試験問題としての複製—— ——点字による複製等——		29
国立劇場ニュース		31

九月の祭り

天 野 武



北陸の能登地方に「盆を過ぎればニギリ袖」という諺がある。この時には、旧盆の精霊送りがすむころを境に、夏から秋へと移る季節のかわりめを肌で感ずる敏感さがうかがえて、懐かしい。暦の上ではとくに立秋は過ぎていて、九月ともなれば、全国各地の農山漁村はもちろん、町場といわれる地方の都市でも、秋の気配につつまれて暮らすむきも少なくなっている。

この月におこなわれる祭礼行事では、往時陰暦によってなされていたものを陽暦の該当期日におこなったり、一月送りで九月におこなったり、などという例も多く、新旧の混交に著しい点が特徴としてあげられる。

現在九月一日におこなっている、各地のハッサク（八朔）と呼ばれる行事、同十三日のイモノコタンジョウ（出雲・イモヌスビ（対馬）などと呼ばれるいわゆる芋名月の行事は、かかる好例といえよう。陽暦の使用から一世紀余を経過している時の流れを考慮するとき、たとえ祭礼のなされる暦日に変化があったにしても、こうした行事が永い伝統を有して存続してきた背景には、生活実感を重視してきた民衆の支持があったのを忘れることはできない。

個々の花に見立てたものを結んで垂れ下げたものである。

本祭りの日には、参道を通ってお旅所までの約二百メートルを神輿の渡御がある。ホロシヨイッコの装いは、鼻に白粉を塗って化粧し、腹がけに前掛、半天に手甲、脚半をつけ、いかにも晴れがましい。祭りの庄巻はホロシヨイッコが神輿の渡御にお供をする点で、町内の上組・下組各一組二人のほろが、天狗役を先頭に、紳・太鼓・横・鉦・錦旗・下組はろー上組はろー神輿・神官・隨身・楽・氏子総代の順で行列に加わるのである。多分、ほろは稲の穂に見立てられているのであろう。

ここで特筆したいのは、ホロシヨイッコになるのは上組・下組を構成する家の長男に限られる点である。二人一組になってこの役割をはたす関係から、長男が出生するとすぐに他に希望者をさがして届け出しておく。そして、その届け順にしたがい、順次ほろ祭りのホロシヨイッコの役につくのである。ホロシヨイッコになる年齢は記録によると一定していないとのことであるが（埼玉県教育委員会『ほろ祭』）、ほぼ青年団へ加入するより若い年齢で担当するよう配慮されていて、人生の折目の儀礼という性格をみ



ほろ祭りの行列

ハッサクや芋名月の祭事内容は各地で一様ではないものの、その実態を比較検討するとほぼ民衆の真意がつかめる。前者は種掛けをなしたり、鳥追いの囃えごとを発したり、あるいは風祭りを内容としたりしていることなどから判断すれば、稲作の豊饒を願うものであったことがわらう。また後者では、この日山いも・いもの子の類を掘りおこしてくるか、あるいは小豆飯とともにそれらを神に供えようという類の伝承が多く、芋名月の晩は誰の畑のものを盗んでもよいとされていたところも多かった。今日の常識からすれば弊害を伴う行為とみえつたであろうが、本来は神に供えるため畑のものが用意されたのであって、それゆえにこそ盗みも公認されたのであろう。芋名月の晩は単に月を賞する風流の夜ではなく、むしろ月の満欠によって農事をすすめるため神事をなす日と推測されるのである。

ハッサクや芋名月の祭事をかく理解すると、これらには土に汗して生活を支えてきた先人の願いともいえるべき心情が伝えられているように思われる。さて、九月は全国津々浦々で秋祭りになされる月である。秋祭りの実態は、ムラや町内などそれを支える伝承母体の規模や構成、あるいは住民の関与の

るおもしろい。

その二は、毎年九月二十日におこなわれる石川県鹿島郡中島町熊木に鎮座する久麻加夫登阿良加志比古神社の秋祭りである。この祭りはいわゆる惣社祭り、お熊甲の二十日祭りと呼ばれ、お熊甲はリウバの鏡、親のなはいは娘でしれる」といわれて近辺の熊木郷十九のムラから各神輿が寄り合って賑わいをみせる。初めて祭りを迎えた嫁たちが着飾って参詣する姿もみられる。この祭りに寄り合う各ムラではムラ内の男たちを総動員して参加する慣例で、数キロも離れたムラから参加する例もあって負担は重い。人手の少ないムラでは祭り人足のユヒ（結）でこれを賄うことも珍しくなかった。猿田彦に扮する男の先導で、黄金の波うつ加茂川原へ渡御する。とくに各ムラの神輿のお供をする梓旗は三十数流にもおよぶ。木杵の中央にたてられた高さ十間余の一木杉には、長さ八間・幅三尺余の深紅の羅紗製大旗がとりつけられてあり、竿の先にはドンブクと呼ばれる飾りがある。鉦・太鼓の離子にあわせて、大勢の若者たちに昇かれて練り回るのである。いかにも地域的特色を感じずにはいられない。

このように、九月におこなわれる祭礼の種々相の一端にふれたにすぎないものの、その顕現形態には地域的特色がみられることは確かである。しかし、そうした祭礼行事のなかにも、はるかなる過去から現在にいたるまで受け継がれてきた庶民の心情とていうべきものがあつたと看取されるのである。それは、人々の生活の舞台にめぐりくるまぎれもない季節に対する感覚であり、自然に対する恩恵の念ではなかつたろうか。ハッサクや芋名月、それに秋祭りなどの行事には、収穫を目前にした人々の真情がうかがえる点では共通していると思う。

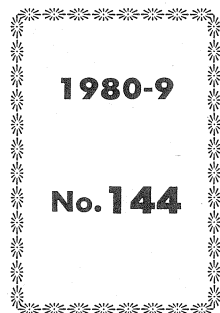
仕方などによって一様ではない。ちなみに、正月や盆の行事などにまさる規模で賑々しく神輿の渡御がなされるもの、山車・壇尻・屋台の類が曳行されるもの、あるいは獅子舞が奉納されたりムラ内を一巡するものなど様々である（本田安次ほか編『日本祭礼地図』田秋季編参照）。かつ祭祀組織や役割分担の実態面でも、頭屋制が厳守されていたり年齢階梯制がみられたり、祭り市がたち、旅の行商人が店を並べる事例もあつて一律に規定できない。ただ、職業分化のあま目立たぬ農山漁村では、住民の地縁的意識を支えられ、住民総参加の形でなされるものが少なくなく、たわやかな総りや豊漁などに期待し、家内の無病息災や子供の健やかな成長を祈願するものも多かったのである。秋祭りの具体例を一、二挙げ、これらの一端にふれてみよう。

その一。九月十五日の埼玉県越谷市古谷本郷のほろ祭り（ほろかけ祭り）である。元来旧暦八月であったものが明治十三年以降現行のようになったという。氏神八幡宮の秋祭りがほろ祭りと特称されるの



ホロシヨイッコ

は、ホロシヨイッコと呼ばれる子供がほろを背負って祭りに参加することに由来する。ここで、ほろとは、竹籠状のものに三十六本のヒゴをつけ、各ヒゴに何



【表紙】

静物

——パレット・燭台・ミノトールの頭部
(部分)

バプロ・ピカソ画

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

職人と芸術家……………犬丸 直 4

演劇のスタイル

——舞台と観客の変容——……………水落 潔 7

第10回カルコン報告……………倉田文作 9

アメリカ巡回

「円山四条派絵画展」終わる……………佐々木丞平 12

〔随想〕

若羌という集落

——西域南道の旅——……………井上 靖 16

文化庁ニュース

全国・ブロック別民俗芸能大会について……………18

国宝・東福寺三門の模型完成……………19

「絵画のアール・ヌーボー

——ヨーロッパと日本」展……………19

〈新設法人紹介〉

財団法人劇団すぎのこ……………20

社団法人東光会……………21

文化庁企画・提供「美をもとめて」10月の放送予定……………21

祭礼歳時記シリーズ ⑥

10月の祭り……………榎本由喜雄 22

我が県の文化行政

個性豊かな県民文化の振興を目指して

——愛媛県の文化行政——……………井上平加寿 24

海外文化行政事情シリーズ ③ 〔C D I 報告書から〕

博物館局とスミソニアン機構……………松野 精 27

著作権シリーズ(16)

著作権の制限——営利を目的としない上演等——……………29

国立劇場ニュース……………31

十月の祭り

榎本 由喜雄

(文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化課主任文化財調査員)



旧暦の九月九日は「重陽の節供」「菊の節供」と呼ばれる。「重陽の節供」とは、陽の数である「九」が重なるから重陽というのであり、「菊の節供」とも呼ぶのは、宮中での日、天皇が紫宸殿または神泉苑において宴を開かれ、群臣に謁を賜り、詩歌文章を課された、御座近くには季節の花である菊花が花瓶にいけられたりした。この節会には「菊餅宴」とか「菊花宴」などとも呼ばれたのである。

これは、いずれも中国思想の影響によるものであるが、わが国でも旧暦の九月九日を中心に、同十九日、同二十九日の三度の九日を重視し、「九月節供」といって農家の人々の年中行事の中の大事な一つになっている。この考え方は北は東北地方から南は九州地方にまで広範囲に伝承されており、収穫による秋祭り、土地によっていろいろな民俗がある。たとえば秋田県では九月八日に餅揚きをして、翌九日を節供といって農事を休み、菊の花を酒にひたして神にお供えし、嫁は新米によって揚き上げた餅を持って、自分の生家に「節供礼」に出かける。また、大分県の国東半島では、栗御飯をこの日に神仏に供え、親方や親類に初穂を持って行き、この日を「栗の節供」というなどである。これらを見ると、

収穫後に、これを神に供え、感謝するとともに、家族・親類・知人が相寄り、神に供えた飲食と同じものをとにもすることで、それが南北に長いわが国では収穫の時期により、おめでたい九の数字をとって旧暦の九月九日のこともあれば、同十九日のこともあり、また同二十九日のこともあった。さらに祭りに新米を用いなければならなかった。さらに祭りに限定することは困難であったので、九月・十九日・二十九日ばかりでなく、場所によってはこれらの日の前後に祭りを行う所も出て来るようになった。祭りが九月を中心に執り行われるので、「御九日」すなわち「オクンチ」と呼ばれていたが、九州地方の北部では、上述の意味の祭りを「オクンチ」と呼んでいたが、後にその意味が拡大して解釈され、秋の祭りを「オクンチ」と呼ぶようになり、「供日」「宮日」などとも書いている。旧暦の九月のこの頃はちやうど稲の刈り上げが行われる時期で、収穫を祝う秋祭りが各地で行われているのである。

「長崎のくんち」の「くんち」という語も前述の秋の祭りという意味の「オクンチ」と同じである。「長崎のくんち」については、いろいろな人がそ

の内容の壮麗さを述べている。その一、二の例を上げると、著名な人形浄瑠璃作者である近松門左衛門は、その作の「博多小女郎浪枕」で、抜荷人の毛刺九右衛門という登場人物に長崎なまりで次のように語らせている。

「うそじやなかばん、きかつしやれ、九月七日九日は氏神どんのまつり、本踊りいろ、唐子踊りいろ、見事なことばん……」

また、元禄の頃に長崎の島にきたオランダ人の医者ケンフェル（ほんとはドイツ人）が、彼の著による「日本史」の中で、「長崎のくんち」を、

「この祭りの踊りは西洋のドラマであり、まことに巧妙で泰西の第一流の俳優にくらべて劣らない。」

などと書き、はじめて「長崎のくんち」をヨーロッパに紹介している（永島正一著「続長崎ものしり手帳」より）。

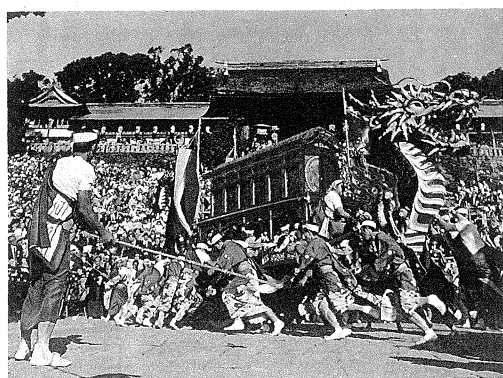
このような「長崎のくんち」と呼ばれる祭礼はどのような祭りであろうか。現在、長崎市諏訪町に鎮座する諏訪神社の十月七日・八日・九日（以前は旧暦の九月七日から同九月日まで）の祭礼で、江戸時代の初期、まだ海外の諸国との交渉が盛んであった時代、幕府はキリスト教がわが国に次第に勢力を得てくることを危険視し、これを断罪した。長崎でも、



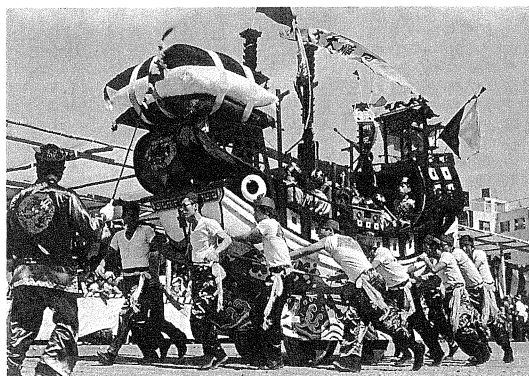
八坂町 傘鉾

この諏訪神社がキリシタン勢力への対抗政策の一つとして寛永元年（一六二四）に建てられたが、潜伏キリシタンに対する対策として、歴代の長崎奉行が毎年この神事に参加する踊町に相当の経費を出し、さらに寛永十一年（一六三四）、青木賢清の奔走によって、長崎奉行がこの神事を長崎全町民の神事として認定するなど特別に奨励したので、「くんち」は年々盛大となり、次第に長崎の人々の生活の中に定着していった。

「くんち」は毎年六月一日の「小屋入り」で始まる。「小屋入り」とは年番町と踊り町は、それぞれ町旗を先頭に世話役や踊り子が着飾り、「シャギリ」の道中囃子で諏訪神社に到着し、修祓を受け、参拝する。この日から踊り町は「小屋がけ」をして、踊り子たちの練習がはじまる。八月下旬には「神興昇ク

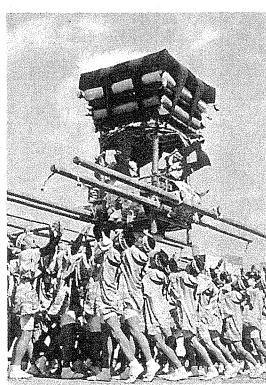


西浜町 竜船



元船町 唐人船

所に渡御され、一日おいて九日に再び御旅所から神社に還御される。奉納踊りは七日には諏訪神社をはじめ大波止の御旅所や八坂神社、伊勢宮、公会堂の順に踊られる。翌八日は庭先踊りで、奉納踊りが自分の町内の各家々を回って踊る。つづいて翌九日は御旅所に安置されていた神輿が諏訪神社に還御される。この日も奉納踊りが御旅所、諏訪神社、伊勢宮、



樺島町 コッコデショ

八坂神社の順に踊られる。奉納踊りは「傘鉾」「本踊り」「その他」の三種に区分される。「傘鉾」は踊り町の先頭に立つもので、「だし」（上部の飾りもの）にそれぞれの工夫がなされている。盛時は七十二を数えたが、現在は約半数に減少している。「本踊り」は踊り町内で編成するが、それができないときは検番（丸山町・寄合町）に依頼する。いずれの場合も地方（音楽を受け持つ）は検番に依頼している。踊りの内容は特に定まったものはない。「その他」には、「ひきもの」「通りのもの」「かつぎもの」などがある。たとえば「川船」「唐人船」「恵比須船」「御座船」「宝船」「オランダ船」「御朱印船」「竜宮船」「鯨のシオ吹き」「コッコデショ」「竜踊り」などがある。

これら豪華絢爛な奉納踊りが諏訪神社の社前や御旅所で、大勢の観衆を前に順々にその姿をあらわすと、人々は「モッテコイ、モッテコイ」の歓声を上げる。まことに長崎という異国情緒豊かな都市の祭りで、長崎市民の気概がよく表現されたものである。なお、昭和五十四年二月、「長崎くんちの奉納踊り」の名称で、国の重要無形民俗文化財に指定されている。



1980-10

No. 145

【表紙】

第22回アンデパンダン展に参加する
よう芸術家たちを導く自由の女神

アンリ・ルソー画

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

も く じ

寄席と寄席芸の展望	北村一夫	4
日常語の中の古語	安嶋 彌	6
〔報告〕		
アメリカに学んだ日本人画家たち ——昭和54年度文部省在外研究員雑記——	岩崎吉一	9
第4回全国高等学校総合文化祭を終えて	石川県教育委員会事務局学校指導課	11
〔随想〕		
移民作家のこと	本間正義	15
文化庁ニュース		
文化庁の昭和56年度概算要求まとまる		17
第14回現代美術選抜展		19
特別展「茶の美術」		19
「イタリア・ルネッサンス美術展」		20
特別展覧会「古面の美——信仰と芸能——」		21
昭和55年度（第35回）芸術祭協賛公演決まる		21
第4回指定文化財展示取扱講習会の開催		24
祭礼歳時記シリーズ ⑦		
11月の祭り	榎本由喜雄	25
海外文化行政事情シリーズ ④〔C D I 報告書から〕		
アメリカの地方文化行政	松野 精	27
著作権シリーズ (17)		
著作権の制限 ——時事問題に関する論説の転載等——		29
国立劇場ニュース		31

十一月の

祭り



榎本 由喜雄

（文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化課主任文化財調査官）

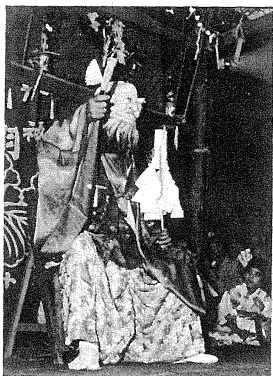
岡山県の旧備中地域すなわち川上郡、阿哲郡、小田郡、後月郡、上房郡、新見市、総社市及び高梁市などでは、秋から冬にかけて、この地方の古い信仰である荒神社の式年の祭りの際に夜どおして神樂が舞われる。この神樂を「備中神樂」とか「備中神代神樂」とか「備中神殿神樂」などといったっている。この地方では、人々は荒神の分身であり、人々の生命の根源は荒神であると考えている。このため誕生後三十三日の初宮参りは荒神へしたり、「牛荒神」といって、農耕に使用する牛の生命までも荒神とのつながりを考えている。しかし一方では疫病の脅威や風雨の災害をもたらすのも荒神の神慮とし、荒神は人々から敬愛されるとともに恐れられた。このため一族の長が中心となって、神慮を慰めるため、自分たちの祖先神として荒神を毎年祭るとともに、七年目、十三年目などには式年神樂といって盛大に荒神祭りを執行する。現在でも一戸だけで荒神を守っているもの、村落、小字、大字などで守っているものなど多様である。また、一族の長が中心となって

執行してきた「頭屋制度」は「大当番」にかわり、回り当番制になっている所が多い。

備中神樂の歴史をふりかえると種々の記録があるが、その最も古いものは川上郡成羽町に鎮座する大元八幡神社に所蔵される「八幡旧託」で、これには「荒神神樂の時は、神殿を作り、本白蓋を吊り申しせうろは、当所より裁可つかまつるべきこと」とあり、享祿二年十一月十八日と日付けが書かれている。享祿二年といえは西暦一五二六年である。足利義政が京都に銀閣寺を造営したのが一四八三年で、これより約四十年後の文書であるから、いかに古くからこの神樂が執行されていたかがわかる。しかし幕末頃から次第に従来から執行されていた神樂を潤色・整理しようとする気運が中国地方に起こり、備中地方でも西林国橋によって神樂が改革された。西林国橋は明和元年に成羽町に近い福地の神職の子として生まれ、後に母の実家の神職の上日名の藤井家に入り、国学を学び、京都にも遊学し、文政十一年、上日名で没している。国橋は「古事記」「日本書紀」な

どの神代物語の中から「天の岩戸開き」「大國主の国ゆずり」「素戔の鳴の尊の大蛇退治」の三篇を演劇風の神樂に仕組んだ。これがいつしか備中の人々の心に深く入り、備中神樂の古い様式を残している神事や神能と深く結びついて、今では、新旧の別がはっきりしないほどに一体化して、神代神樂といつて毎年、毎年舞われている。

昔は備中神樂は神職の人たちがすべて舞っていたが、前述の西林国橋が創案した神代神樂は一般の人から好評をもって迎えられ、神職以外の人々でも、これを上手に舞う者が多く出て来て、しまいにはこれらの人々が祭りの際に舞うようになった。平素は農業などに従事しているが、秋から冬の農閑期がちょうど神樂の時期であるので、このような人々が神樂太夫となって、六、七人が一団となり、各地の祭りに招かれて行き、神代神樂の部分を担当して舞っている。また現在でも旧備中地方では酒宴の後では必ずといっていいほど太鼓が座敷に出され、神職や神樂太夫でない、普通のいろいろな人が太鼓の囃子につれて神代神樂の一節を舞うというほどで、神代神樂に対し一般の人の目が非常によく肥えている



備中神樂

のである。

備中神樂の古記録は前記の大元八幡神社の享祿二年の文書をはじめ、神職側にも、氏子側にも多数保存されている。これらを見ると、現在でも大体皆どおりに神樂が伝承されていることがわかる。

神樂を執行するか、執行しないかは地区の人々にとって大問題である。氏子の人々の間で何回も相談会が開かれる。相当な経費が必要だからである。いよいよ執行するとなると、神樂を執行する時期と場所を決定する。さらに経費の調達、役割分担を相談する。神樂を執行する日かその前日頃に神職が神樂宿に集まり、小刀で白蓋、御幣、幡などを切る。材料は和紙である。次に神殿（神樂を舞う所）を特設する。これを神殿掛けという。神殿を掛ける場所とは多くは荒神社の近隣の田や畑の一部となっている。しかし場合によっては屋内で神樂を舞うことが多くなってきた。屋内の部屋が神殿に準じて整備される。神殿掛けを行っているとき、一方では新薬で蛇が作られる。長さが約七メートルから八メートル、胴回りが約六十センチから七十センチで、御神酒をいただきながら作るの一日がかりの仕事である。

このころ神宿の家では、神職の手で清浄な湯により、神床や屋内を清めるための「湯敵い」が行われる。また神職と氏子が正装で荒神社へ参り、神酒・神饌を供え、神樂を執行することを奏上し、神靈を神宿へお移しする。さらに地区内の諸神や氏子の宅神をもお迎えする。ここでお迎えした神々を祭る「当番祭り」が執行され、終わると、いよいよ神殿へと神々をお移しする。しかし屋内で神樂を舞う場合は、このまま、ひき続いてここで神樂を舞う。

前述のごとく備中神樂は旧備中地方一帯に伝承さ

れていて、その地域は広範囲であるので、それぞれの地区によって、神樂の伝承内容やしきたりが若干相違するものもあるが大体において同じである。修祓、役指しの舞、神舞、白蓋行事、奉幣、祝詞奏上、総敵い、猿田彦の舞、神能（岩戸開き、国譲り、大蛇退治、吉備津、五行神樂）、剣舞、布舞、綱舞、諸神神樂、退下の祝詞、神送り、当開きとなる。なお、七年・十三年・三十三年目ごとの式年神樂は前述の如く大規模な神樂で徹夜で行われるが、平年の例祭にはこれを簡略化して神能三番（岩戸開き、国譲り、大蛇退治）のみを舞うことが多い。

「修祓」は神職による祓い、「役指しの舞」は祭主（神職）が神樂行事のすべての役職をいわたすために



備 中 神 樂

舞う。神舞」は神樂のはじめに、すべてのものを清浄にするために舞う。鈴の舞・綾笠の舞・神の舞と舞ってゆく。「白蓋行事」は清浄になった神殿へ荒神をはじめ神々を勧請する。動座加持、鎮座加持とがある。唱え言に合わせて白蓋を上下左右に揺り動かす。「猿田彦の舞」は二人あるいは四人で猿田彦の面をつけ、赤熊・黒の筒袖で白千早を着し、赤の胸当をし、裁着をはき刀をさし、両手に扇子を持って現れ、やがて刀を抜く。問答後、薙刀に変え、最後に扇子を開き舞いおさめる。勇壮な舞である。「岩戸開き」は、天児屋根命と太玉命とが鳥帽子、舞衣の上に陣羽織を着、扇子と白幣とを持って現れ、名乗りをあげて正面に並んですわる。思兼命が同様の装束で幣と扇を持って現れ、ひとしきり舞って太玉命と問答、天鈿女命が舞衣の上に白千早をまとい、扇と鈴とで幣と扇を持って現れ名乗り、岩戸を開くと天照大神が出現、一同平伏。国譲り」は武甕槌、経津主の両神がつれ舞いで稲掛けの浜に着いた態、大国主命の大国舞、両神々問答、事代主命の鯛釣りの舞、武経両神が鎧をまとい現れると、そこへ武御名方神が同じ姿で現れて渡り合い、ついに降伏。「大蛇退治」は、素戔鳴命の一人舞、翁、嬬が出て尊と問答、稲田姫の一人舞、尊が出て姫とのつれ舞、酒つくりの所作があつて大蛇が出、尊がこれを退治してはいる。「五行神樂」は太郎、次郎、三郎、四郎と五郎王子との問答を主とし、春夏秋冬のうち土用十八日ずつを五郎にあたえておさめるという舞。「蛇舞」は、鰲蛇による託宣行事、布舞」は白布を振る託宣行事、剣舞」は剣を持って舞う古風な舞いである。なお備中神樂は昭和五十四年国の重要無形民俗文化財に指定された。



1980-11

No. 146

【表紙】

マリ＝アンリエット＝

ベルトレ・ド・ブルヌフ夫人の肖像

ジャン＝マルク・ナティエ画

解説は20ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カッド・林美紀子

もくじ

文楽の楽しさ……………如月青子	4
伝統芸能と青年層……………藤波隆之	7
国際文化交流の現状と課題 ——国際交流基金のあらまし——……………草場宗春	9

〔報告〕

文化財保存修復国際研究センターに学ぶ ……………藤村 泉	12
---------------------------------	----

〔随想〕

立膝考……………北村哲郎	15
--------------	----

文化庁ニュース

第4回日本民謡まつり終わる ——皇太子殿下も御覧——……………	17
米国巡回「琳派絵画展」について……………	18
スペイン国王・王妃両陛下来日記念展 「スペイン絵画・ベラスケスとその時代」……………	19
昭和55年度都道府県宗教法人 事務担当職員研修会の開催……………	19
〈新設法人紹介〉 財団法人東京交響楽団……………	20

祭礼歳時記シリーズ ⑧

12月の祭り——銀鏡神楽——……………榎本由喜雄	21
--------------------------	----

我が県の文化行政

文化の創造と継承のために ——富山県の文化行政——……………成瀬弘生	23
---------------------------------------	----

海外文化行政事情シリーズ ⑤〔CDI報告書から〕

アメリカの美術施設……………松野 精	26
--------------------	----

著作権シリーズ⑩

著作権の制限——政治上の演説等の利用—— ——時事の事件の報道のための利用——……………	29
---	----

国立劇場ニュース……………	31
---------------	----

十二月の祭り 銀鏡神楽

榎本 由喜雄

文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化課主任文化財調査官



日向灘に注ぐ一ツ瀬川を、その源に溯って行くこと
特別史跡として著名な西都原古墳群の所在する宮崎
県西都市の妻に到着する。この妻を通過して道が西へ
西へと進んでいる。いわゆる米良街道である。道は
正面に九州山地の山々を見ながら村所へ出、さらに
この山々を越えて、宮崎県から熊本県に入り、湯前
多良木、人吉方面へと進んでいる。国鉄杉安線の最
終の町、杉安を過ぎるころから、道は狭くなり、一
ツ瀬川を右に見たり、左に見たり、川にそって曲り
くねりながら進んで行く。山峡の美しい景色がつぎ
つぎと目に入ってくる。しばらく行くうちに湖沼の
ようなものが見える。これこそ一ツ瀬ダムで、やっ
とバスの一瀬停留所に到着する。ここで米良街道と
分かれ、道を右に曲り、一ツ瀬川の支流である銀鏡
川にそってさらに進む。まだ一ツ瀬ダムが続いてい
る。宮崎駅より自動車で約二時間で、ようやく銀鏡
に到着する。

銀鏡は行政区画では宮崎県西都市銀鏡であるが、
一ツ瀬川の支流の銀鏡川にそった小地区である。古
くは一ツ瀬川の上流地帯を米良荘といひ、北は椎葉
南は須木に境を接し、西は九州山地を境に、熊本県
の人吉盆地に続いている。この地は東西三〇キロ余
南北は一五キロから二〇キロ余の広大な面積を有す

るが、全域が山地であるので人口は僅かに一万人余
である。この米良荘は東米良と西米良とに大別され、
銀鏡は東米良に属していた。

肥後（現在の熊本県）の菊池氏の一族であるとい
われる石見守重為が南北朝時代に、征西將軍懐良親
王の一人である爵松丸を奉じてこの山中に潜入し、
米良氏と名のり、銀鏡、村所、小川等に居を定め、
豊臣秀吉さらには徳川氏に服属し、人吉藩の相良氏
の客分として遇せられた。銀鏡は米良氏の支配の下
に、後には浜砂、黒木、中武等の各氏がその中心と
なって、今日まで古式豊かな風俗・慣習の下に格調
高い生活を営んできている。

昔から、この銀鏡の地に住む人々の信仰の中心は
銀鏡神社である。銀鏡神社は東米良の霊山といわれ
る竜房山の麓の上原の地にある。この地は縄文時代
の末期から古墳時代までの遺跡があり、非常に古
い時代からの中心地であったようである。祭神は懐
良親王・岩長姫命・大山祇命で、御神体は葉文鏡で
ある。この鏡は後醍醐天皇より懐良親王に賜ったも
のであると伝えられている。御祭神には竜房大神、懐良
親王・岩長姫命・大山祇命・二柱大神の五柱とする
異説もあり、また西ノ宮大明神とも呼んでいる。この
神はいわゆる銀鏡神楽の中で最も重視されている

「西ノ宮大明神降居」で神として出現してくる。

銀鏡神社を本社として、その境外末社が、上揚古
穴手に手力男神社、同征矢拔に宿神三宝荒神社、銀
鏡杖立に若男神社、同中島に六社稻荷神社、八重栗
田に七社稻荷神社の五社がある。これらの境外末社
の神々が神楽執行の日に銀鏡神社にお集まりになる。
銀鏡神社の大祭は十二月十二日から同月十六日ま
で五日間にわたって執行される。（もとは旧暦十一月
十四日を中心に、同月十二日より十六日まで執行さ
れた。）まず十二日は門注連祭で社務所や祭場の大祓
祭を執行する。社務所内柱に神を樹て、注連縄を入
き、家の清めを行う。宮司以下諸役一斉に潔斎する。
十三日には御遷奉納と二十八宿星祭で、神社側
の大祭諸準備、願主・氏より御遷神饌を奉納、二
十八宿星祭執行、星の舞、神楽一番奉納、十四日早
朝、宮司は神殿及び末社の神衣替を行い、宮人は神
の整備、続いて宿神三宝荒神社、六社稻荷神社、手力
男神社、若男神社、七社稻荷社にそれぞれ出向き、
諸神を供奉し、午後六時本祭場に御神幸になるよう
お迎える。祭場御到着の際は宮司及び伶人の一部
で奏楽の中に奉迎し、神殿内に奉斎する。宮司以下
潔斎する。午後七時、修祓、献饌、祭典、祝詞奏上、
御遷奉納主拝礼、神酒を受ける。祭員、参拝者拝礼、
神酒を受ける。神楽奉納、三十一番を十五日午前九
時頃まで徹夜で奉納する。終われば繰下し行事・逆
倒しの行事と呼ばれる諸行事で祭場のすべての飾り
を取りこわし、逆、ひもろぎ、神・注連などをその場
に山積みする。午前十一時より神殿祭、末社祭、こ
の間に初三舞奉納、稚児の初参拝あり、続いて狩獵
の神の祭礼である狩法神事があり、終わって神送り
の行事があった、いたしきばらい（直会）の宴とな
り、神饌であった猪の頭、その他を料理した雑炊を
いただき、御神幸のあった末社の神々が御還幸され、
これに供奉する。翌十六日には六社稻荷神社の大祭、

しいしは祭およびこしき祭が執行される。称宜が銀鏡川の川原で大祭に氏子が供えた猪の耳の七切肴を串指しにして供え、殺された獲物の霊を祭る。祭典終了後、現地で関係者一同七切肴をいただく。これで大祭は終了するが、祭りの頂点は一日一晩、夜通しで演じられる神楽である。

祭場は銀鏡神社の拝殿の前庭で、これに三間と三間半の舞処を設け、祭場とする。四隅に真柴木を立て、注連縄を張り、幣を垂らす。カミ、タカという飾りと四方および中央に五色の幣を垂らす。祭場の中央には、ア、アという丸形で紙で貼り合わせたもので、これの下に幣を垂れ、その中央に五色の幣と五色の紙を四角に小切りにしたものを入れて吊り下げる。正面に通、ひもうぎを立て、内宮と外宮を奉斎する。



銀鏡神楽

この間に青柴の若木を立て並べて山を作る。お遷と山に注連縄をかけ、これに御幣をつける。御遷、ひもうぎの前に棚を作り、神々に神饌を供える。

神楽に参加する人は二十五人で、宮司と神楽頭取によって統率される。祝子株という家が十二軒あり、その家の長男がこれを嗣ぐ。十二名の正祝子である。他に神への奉仕の心からなる願祝子がある（宮司の認定による）。

氏子からいろいろな神饌が上げられるが、猪の頭は必ず供えることになっている。筆者がこの神楽を拝見にあがった時は十三頭の猪の頭が供えられた。星祭に纏に二十八の幣をつけた御遷が願主や氏子から献上されこれを立てる。

神楽の囃子は笛・太鼓・手拍子・ガク（一尺四寸ぐらいの板木を太鼓に合わせて打つ）で構成される。神楽は三十三番で、古風な舞が続く。立願の舞である「星の舞」、御神屋を清める「清山」、結界を定める「花の舞」、地鎮を意味する「地割」、鵜戸の神を招く「鵜戸神楽」、鵜戸の神の出現である「鵜戸鬼神」、銀鏡神社の御祭神の西ノ宮大明神を招く「幣指」、同神の出現である「西ノ宮大明神」、宿神三宝荒神を招く「住吉」、同神の出現である「宿神三宝荒神」、続いて「若男大明神」で同神の出現、六社稲荷大明神を招く「初三舞」、六社稲荷大明神」で同神の出現、七社稲荷大明神を招く「地舞」、七神稲荷大明神」で同神の出現、五方固めの「神楽」に続いて「莊嚴」柴荒神「一人剣」地舞「網荒神」「網神楽」「地舞」「衣笠荒神」により、招かれて柴荒神、網荒神、衣笠荒神が出現する。さらに天の岩戸の神話に因み、「神和」

「大神神楽」「手力男命」「戸破明神」を舞い、田の豊作を祈る「室の神」「おきえ」「子すかし」「獅子舞」があり、「白蓋鬼神」「笠取鬼神」でそれぞれの神が出現、「穢りおろし」で降臨した神々も昇神し、「狩法神事」（猪とぎり）で狩猟を祈願する。最後に銀鏡神社に御神幸になった境外末社の神々が各神社に還幸される



銀鏡神楽

「神送り」で終了する。

この神楽ではいろいろな神が招かれて出現するが、他の神楽に登場する記に記されている神々よりも、銀鏡の人々が信仰する銀鏡の神々が重要な神々となっている。特に「西ノ宮大明神」に登場する西ノ宮大明神は銀鏡神社の御祭神で、それに使用する仮面は御神体準じて重要視されている。この仮面を宮司がつけて出現するが、これはもはや宮司ではなく、西ノ宮大明神が出現したのである。このとき神職は正務して神を拝し、神歌を唱え、銀鏡の人々は拍手を打って拝し、賽銭を半紙に包んで打つ。まさに銀鏡の人々の敬う神が現れ、人々の繁栄を祝福して舞うという神楽で、古風で、全国でも数少ない、芸能史上価値高い神楽である。

文化庁月報



1980-12

No. 147

【表紙】

キリスト降誕

ロレンツォ・レオンブルーノ・
ダ・マントヴァ画

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

地域の文化活動と生涯学習……………山本恒夫	4
建造物の保存と修理……………伊原恵司	7
死者の肖像	
——最近におけるアメリカの	
バプリシティ権判例の動向——……………大家重夫	10
〔報告〕	
ヨーロッパの方言研究	
——昭和54年度文部省在外研究員雑記——	
……………飯豊毅一	12

文化庁ニュース	
昭和55年度文化勲章受章者、文化功労者決定……………	15
昭和55年秋の褒章受章者決定……………	16
昭和55年秋の勲章受章者決定……………	16
昭和55年度包括宗教法人等	
管理者研究協議会(京都会場)開催さる……………	16
史跡の指定等	
——文化財保護審議会の答申——……………	17
指定文化財(美術工芸品)修理技術者講習会の開催……………	18
第27回文化財保護強調週間……………	19
昭和55年度文化財愛護全国研究集会……………	19
著作権審議会第31回総会開催……………	19
昭和55年度使用教科書等掲載補償金額決まる……………	20
文芸作品の放送使用料引き上げ決まる……………	20
翻訳権の10年留保の廃止について……………	20

祭礼歳時記シリーズ ⑨	
正月の祭り——大日堂舞楽——……………榎本由喜雄	21
我が県の文化行政	
県民生活の向上をめざして	
——三重県の文化行政——……………田部良夫	23
海外文化行政事情シリーズ ⑥〔CDI報告書から〕	
イギリスの文化行政……………松野 精	26
著作権シリーズ(19)	
著作権の制限——裁判手続等における複製——……………	29
国立劇場ニュース……………	31

正月の祭り 大日堂舞楽

榎本 由喜雄

（文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化課主任文化財調査官）



昨夜から降り続けている雪はいつこうに降りやまない。いやそれよりもさらにその勢いを増しているようだ。車中から見る雪は空から下に降るのではなく、空中を真横に降っている。雪が踊っているようである。この雪で国鉄は遅延に遅延を重ね、盛岡駅に到着したときは、五時間も遅れてやっとつくという羽目になってしまった。「月一日、盛岡駅のホームに立つ」と同行の人々としやれていつてみたが、なにしろ寒い。花輪線に乗り換えようとしたが、これも雪のため間引き運転とのこと。また暫くの間、駅の待合室のストーブに暖をとる。ホームは乗客で溢れるようになる。やっとホームに入り、幸運にも座席に腰掛けることができた。間もなく発車するが発車・停車と何度もくりかえしながら、ようやく八幡平駅につく。

下車してよいよい大日堂舞楽（大日堂祭堂ともいう）の舞われる大日靈貴神社（秋田県鹿角市八幡平鎮座）に向かう。菅江真澄が「けふのせはの、」に「いかめしい」と形容した大日堂のお堂は、七尺を一間とする九間四方に、高さ十三間の大建物で、周囲には幅六尺足らずの廻廊があった。古くは南部家崇敬の八社の一つであり、寛文六年に、南部家二十九代の太守の重信が再興したものであるが、昭和二十六年、不慮の火災により炎上した。しかし宮司をはじめ関係者の熱心な奔走により、間もなく、もとの九

間四方の立派な堂宇が再建されて今日に至っている。当地の伝えによると、昔、当地の小豆沢に住んでいた夫婦が大日如來を深く信仰し、長者となり、世に「だんぶり長者」と呼ばれるようになった。夫婦の間に美しい娘がおり、後に帝の后となることができた。これにより夫婦の死後、娘は親の霊を弔うため大日堂を当地に建立した。養老年間に元明天皇はこの話を聞き、その孝養に感じ、大日堂を再興させ、祭りの行事として舞楽を演じさせた。その折のものが伝えられてこの舞楽になったという。この伝承は別にしても、当地の舞楽は決して新しいものではない。明治の神仏分離の際に大日靈貴神社と称するようになったが、やはり一般には昔風に大日堂と呼んでいるようである。

神社の境内は祭りの前の静けさというのであろうか、静かな社頭である。雪の中の道を何度も滑ったリ、ころんだりしながら安倍宮司さんの家へ挨拶にうかがう。前に一度うかがったことがあるので、すぐに明日のお祭りの話に入る。お聞きしているうちに自分の心が次第に興奮してくるのがはっきりわかる。明日は午前二時という早朝に小豆沢の祭りの宿にあって出発すること。これに間に合わせるため旅館に帰り仮眠をとる。

この大日堂舞楽を昭和三十年に全国民俗芸能大会

で日本青年館において拝見したとき以来、どうしても現地のお祭りを拝見したいと思い、時期はずれではあるが一度は現地で、現地の人々に舞楽の話聞きにきたこともあった。そんなつのる思いがやっととげられるのかと思うと、僅かな時間の仮眠であるから早く眠ろうとして寝床に入るが、はやる心でなかなか眠りに入ることができない。暫くうとうとするうちにハッと目がさめる。正月二日の午前一時。同行の人々はなんのかのいつて起きてこない。身仕度を整え、準備完了し、旅館前に立って心身をひきしめ、満天の星を見上げていると、やっと他の人も出てきた。

深夜の月光の道を寒さに身をかがめながら宿へと向かう。道を聞こうにも歩いている人は自分たち以外に誰もいない。やっと宿につくことができた。青年たちが近くの池で寝ぎを行っている。この精神が祭りを脈々と現在まで伝承してきたのである。祭りの構成は小豆沢地区のほか大里・長嶺・谷内の計四地区が分担しており、小豆沢には別当及び一の庭、大里には籠屋、谷内には大博士、長嶺には地付神役による大博士などの役の者が世襲でいる。それぞれの地区には別個の芸能が伝えられており、これらの各役が中心になって、役により十日から一か月ほどの潔斎をし、舞の練習をする。そして正月二日の早朝に各地区の宿で舞い、続いて地区の重要な場所である、ついで行列を整えて大日堂に向かう。

小豆沢の場合は神子舞、神名手舞、権現舞、田楽舞を宿や重要な地点でひととおり舞い、権現の頭を箱に奉じて一同が、電神幡、錦幡、高張提灯、太鼓、笛、御幣、ささら、鼓、権現頭、能衆などの順に行列を作り、大日堂の姥杉の所の地蔵堂に至り、ここでも舞う。このころ長嶺、大里、小豆沢、谷内の順に祭りの一行が大日堂に到着する。我々も雪の中を能衆の人々について廻ってきて大日堂についたときは午前八時頃であらうか。もう神社の境内も神社の中

も人々で、それこそ芋を洗うような混雑である。間もなく神降ろしの笛ではないかと思われる笛の音が聞えてくる。箏笛というのだそうだ。堂前で「花の舞」といって神子舞、神名手舞、権現舞が舞われる。このころ堂内から「ヨンヤラヤーセ ヨンヤラヤーセ ソラアンサーセ ソラアンサーセ」という勇ましい大勢の青年の声が聞こえる。堂内から溢れ出ようとする人々と内部へ入ろうとする人々で熱気が満ち満ちてくる。ここで堂内の入口に近い左右の二本の柱を両端にして、振り向かう鉢巻に平服で右肩抜き、若い衆四、五十人が順まわりに廻る「榎押し」があり、続いて「御上乗」の樂が奏されるといふに、大小の竜神幡を持った幡持ちが目の色をかえて堂内に走り込み、大小の竜神幡を下かりほり上げて、さらに左右の樓に投げ上げる。樓の者は受け取って、さらに左右の樓に投げ上げる。樓の者は直ちにこれらを欄干から下げる。まことに息を呑むすばらしい一瞬である。緊張の一瞬が過ぎると堂内は観衆の興奮のつぼと化する。これが終わると、お



五 大 尊 舞

堂内の舞」となる。

堂の中央に十尺四方、二尺高の舞台が設けられている。これが舞の舞台となる。宝殿に向かって左手奥に長嶺、その手前に大里、右手奥に谷内、手前に小豆沢と、それぞれ紺地に日の丸の紋を染め抜いた幕を張りめぐらして楽屋としている。演目とその担当の地区は次のとおりである。神子舞（小豆沢、大里、長嶺、谷内）、神名手舞（神子舞に同じ）、権現舞（小豆沢）、駒舞（大里）、鳥遍舞（長嶺）、鳥舞（大里）、田楽舞（小豆沢）、五大尊舞（谷内）。神子舞は四地区の能衆全員二十九人が一人ずつ舞ったが、今は数人ずつ舞う。その際に代表一人は右手に鈴、左手にシデ（削木に紙シデをつける）を持つ。両手をひろげたり、合わせたりしながら廻る。天神拝礼の舞といっている。

神名手舞は右手にシデを持ち、左手で袖口をとって舞う。左右の袖口を合わせたり、ひろげたりする。地神拝礼の舞といっている。この時に修法（もとは僧侶である別当の役であったが今は神職による祭式、大小行事（散樂）がある。

権現舞は獅子頭を神のあらわれとするもので、この祭りに深い関係のある五之宮神の権現とし、勇壮に舞って悪霊を祓う。

駒舞は作り馬を腰につけた二人の舞子が手綱をとり、駒頭を振りながら足拍子おもしろく踏み歩む。鳥遍舞は刀を持った六人の舞で、頭役の大博士は鈴を持って一人で舞う。小博士は紙シデを手にして舞い、最後にこれを見物の人々の中に投げ込む。これを手にすると山仕事によいといわれ、争って拾う。他の舞人は布に黒漆を塗った願面をつける。これは神聖なものとして取り扱いは極めて厳重である。鳥舞は十五歳以下の子供の舞で鳥甲を冠り扇を持つ。その中の一人はさらに鈴を持つ。この三人で山鳥の舞を舞う。

工匠舞は土師党舞ともいい、高立烏帽子、鉢巻、



五 大 尊 舞

帯刀で、木片に切紙をつけたもの（工匠のノミという）を持って舞う。その中の一人を棟梁という。田楽舞は一人は小鼓を持ち、一人は腰に太鼓をつけ、他の四人はササラを持ち、隊形をいろいろに変えて舞う。

五大尊舞は当地では金剛界大日、胎藏界大日、普賢、文殊、不動の五大尊の舞とし、これらの面をつけた者が二列になって刀を抜いて舞う。さらに大博士は刀以外に左手に鈴も持って舞う。足の踏み方、刀の扱い方に特殊な技法がある。以上各舞とも笛や太鼓の囃子で舞う。各舞はいかにも古い舞樂を思わせる舞い振りで、古風な舞樂・田樂などのおもかけをそこはかとなく感じさせるものが多い。

舞いが全部終了すると、この祭りも終わりを迎える。すっかり興奮して見ていたためか、もう終わりのなにかと思う。しかし時刻はもう正午に近い時間であった。なにか身体の中の興奮が手先から静かに、静かに消えて行くようだ。心の中で祭りの感激を何度も何度もかみしめながら旅館へ帰って行く。



1981-1

No.148

【表紙】

バラをつけた女

ビエール=オーギュスト・ルノワール画

解説は20ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

日本「文化外交」の忘れられた1人の先駆者
…………アイバン・ホール 4

私と中国の歴史…………井上 靖 7

〔随想〕

蓮華草…………鹿海信也 10

〔報告〕

インドを垣間見る
——昭和54年度文部省在外研究員日記抄録——
…………榮樂 徹 12

文化庁ニュース

昭和55年度(第35回)芸術祭
芸術祭大賞・同優秀賞決まる…………15

日本芸術院新会員の紹介…………16

重要文化財(建造物)の新指定
——文化財保護審議会の答申——…………17

アルベルティーナ所蔵
ヨーロッパ版画名作展…………18

昭和55年度宗教法人実務研修会終了、
昭和56年度開催予定県決定…………19

〈新設法人紹介〉
財団法人煎茶道東阿部流…………20

祭礼歳時記シリーズ ⑩

2月の祭り——国東の修正鬼会——…………高橋秀雄 21

我が県の文化行政

生きた巨大な文化財・
日光杉並木街道を中心とした栃木県の文化行政
…………武井 宏 23

海外文化行政事情シリーズ ⑦〔CDI報告書から〕

イギリスの美術施設…………松野 精 26

著作権シリーズ(20)

著作権の制限
——美術・写真・建築の著作物の利用——…………29

国立劇場ニュース…………31

二月の祭り

くにきき しゅじょうおにえ
国東の修正鬼会



高橋 秀雄

(文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化課文化財調査官)

芸術祭特別公演として「日本民謡まつり」が、毎秋、東京の国立劇場で開かれている。その出場演目の一つに、山口県徳山市の「貴船神社夏祭りの舟唄」が選ばれ、その下打ち合わせのために、今年の六月、徳山市に出かけた。「貴船神社夏祭りの舟唄」は、徳山市の杵島に伝えられている海の若者たちのコーラスである。その杵島は、徳山湾の東端に突き出ている大島半島の突端にある小島である。小島といっているのもはや大島半島の一部といったような感じである。徳山駅から車で三十分弱のところであるが、大島半島の道に入るとさすがに自然の風物が美しい。

杵島へ渡る橋の上から、洋上はるかに島影が見えた。案内してくれた徳山市教育委員会の人が、小さい方島影が姫島、その右の大きい島影が国東半島ですと説明してくれた。その時は奇異な感じを受けたが、あとで地図を開いてみてなるほどと納得した。国東半島へ入る時は、これまで日豊本線の杵築あるいは別府からバスに揺られていたたので、ひどく僻遠の地であるように考えていた。ところが、徳山から国東半島の国見町の竹田津までフェリーが運行していて、それを利用すればわずか二時間で国東

半島の地を踏むことができるのである。晴れている時に、国東半島の島影が間近に望めても不思議ではない。

ところで、大分空港が国東半島に設けられてからは、東京から国東半島への道がさらに便利になった。飛行時間一時間三十五分である。日本有数の観光温泉都市別府への観光客は多いが、これまで国東半島まで足をのばす人はあまり多くはなかった。国東半島が奈良や京都とともに仏教文化の花開いた土地であることは知っていても、足の便が十分ではなかったからである。このため、この仏の里はいままで秘境としての趣をただよわせて、心ある旅人にだけその扉を開いていたような感じがあった。しかし、国東半島に大分空港が開港してからは、道路も整備され、観光ルート化もされて、国東半島の良さが多くの人々に知られるようになってきている。

しかし、この地はまだ観光の処女地としての素朴さを失っていない。白砂青松の海岸が続き、数々の文化遺産が往時の仏教文化の盛行をひそかに物語っている。山陰にひっそりと建っている国東塔や五輪塔、さらには端正な九重塔が、国東半島の歴史の重味を伝え、山の頂にはそれぞれに由緒のある寺院があって、旅する人の心を休ませてくれる。

かつて、国東半島と宇佐山郷にかけては、六十寺を越える天台宗寺院が建立され、六郷満山と呼ばれる仏教文化圏を誇った。東の比叡山に対し西の比叡山ということから西叡山とも呼ばれた。これらの寺院では正月の修法行事が、毎年、厳かに執り行われていた。

寺院における正月の修法行事を修正会という。修正会は、正月初頭に国家安穩、厄難消除、五穀豊穡を祈念する法会であるが、国東半島の諸寺院の修正会は、これに鬼走り行事と火祭り行事が合体し、豪壮にして特異な正月行事として伝承され、国東の修正鬼会として広く知られている。

この修正鬼会は、かつて二十数か寺で行われたという記録があり、いまでもその名残を示す鬼面や大松明を保存している寺院もあるが、現在では、国東町の成仏寺、岩戸寺、豊後高田市長岩屋の天念寺の三か寺だけがこの修正鬼会を執行している。成仏寺(旧正月五日)と岩戸寺(旧正月七日)で、成仏寺は奇数年、岩戸寺は偶数年と交互に行われる。したがって今年は岩戸寺の番となる。天念寺の方は、毎年旧正月七日である。

国東半島の修正鬼会は、六郷満山の開基である仁聞聖者(奈良朝養老年間の人と伝える)が、天下泰平、五穀成熟、万民快樂等の諸願成就を祈願するため「鬼会式」六巻の宝経を下賜され、それによって六郷満山全寺院を集め、日本六十余州三千余座の神仏を勧請して大法楽を厳修したことはじまると伝えられている。もはやその真偽のほどはつまびらかにすることはできないものの、すでに鎌倉中期には盛んに執行されていた。

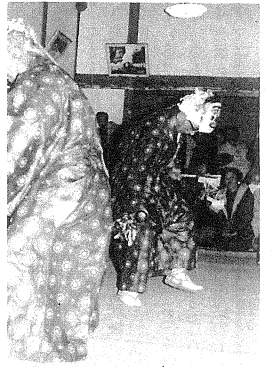
修正鬼会の行事は、六郷満山(国東半島)をほぼ南北に分けて、通称東満山・西満山と呼び、両者で行法に多少の差異があるものの、行事内容はほとんど変わらない。その行事内容は、大きく分けて、大松明の儀・勤行となり、勤行は誂経と立役に二分される。



香水（成仏寺）

昨年の成仏寺の鬼会を例にとれば、午後三時から量の勤行がはじまる。伽陀、懺法導師、序音、回向、仏名と順序にしたがって経文が誦せられる。夜に入ると地元の若者の中から選ばれたテイレンシ（松明入れ衆）がコーリトリ（垢離取り）を行い、盃の儀を済ませてからタイアゲをする。タイアゲとはオオダイ（大松明）に火をつけることである。

堂内では夜の勤行がはじまる。初夜、法咒師、神分、三十二相、呪歌、散華、梵音、繰起、目録、錫杖、米華、開白、香水、四方固、鈴鬼、災払鬼、荒鬼、鎮鬼、鬼後咒と続くのであるが、神分からは囃子の楽器が入ってにぎやかな読経になる。量の勤行の時には、役僧だけの静かな読経であったが、夜に



鈴鬼（成仏寺）

なると次第に人が集まってきて堂の内外にあふれる。米華からは立役となり、僧の人々が配役にしたがって立つて舞いはじめる。足拍子をはげしく踏みながら、けずりかけの香水棒を打ち合わせる香水は圧巻である。舞場の近くにいる人を連れ出して演じさせたりするが、足拍子が合わず笑いの渦が広が



鬼走り（成仏寺）

やがて、やさしい面相の鈴鬼が出てきて、おもしろおかしく法舞を演じる。この鈴鬼が済むと、いよいよ眼目の鬼走りとなり、鬼が登場する。節分の鬼が一般的になっているので、鬼という追ひ払われる悪鬼の方を想像するが、この鬼会の鬼はその荒ぶる力を人々に付与して福を分かち役である。堂内で松明を振りまわして暴れまわった鬼たちが庭に飛び出してくる。カイシヤク（テイレンシの若者）が鬼につき、そろって手をつないで丸い輪を作る。その輪の中に老若男女の見物衆が入る。祈禱の唱え言をしたあと、鬼が見物衆の背中を松明でたたく。厄払いである。

それが済むと、カイシヤクをしたがえた鬼が、すごい勢いで外へ飛び出して行く。壇家の家々をまわって祈禱をして歩くのである。再び鬼が成仏寺に帰ってくるのは明け方である。帰ってきた鬼はまだ暴れまわるが、僧たちがこれを押えつけ、餅を鬼にくわえさせる。鬼が餅をくわえるとやっと静かになる。

そして、鬼後咒が済むと、鬼会のすべてが完了する。天念寺の方は、鬼は堂内だけで動きまわり、外へは飛び出さない。手に持った松明を堂内で振りまわしながら踊るので、見物衆は右に左に逃げまわる。壮絶な光景が展開される。

このように国東の修正鬼会は、単に天台系の純宗教的行事というよりは、僧俗一体となった地域性豊かな祭りであり、民俗的な色彩の強い行事であるとともに、神仏混淆の古風を遺し、さらに宗教的行事が芸能化する道程を示唆するところがみられるなど、無形の民俗文化財としてとくに注目し値する内容を有している。昭和五十二年五月、重要無形民俗文化財指定。

文化庁月報



1981-2

No. 149

【表紙】

ロンドン

アレクサンダー・カルダー

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

日本人の宗教観……………	金岡秀友	4
翻訳権の特例の完全廃止について……………	安達健二	6
〔随想〕		
身辺雑記——建築遺産の昨今——……………	関野 克	9
〔報告〕		
西洋博物館事情……………	原田 実	12

文化庁ニュース		
昭和56年度文化庁予算案の概要……………		15
重要無形民俗文化財の新指定等……………		16
第27回文化財防火デー(1月26日)……………		20
陶芸のバイオニア——八木一夫展——……………		21

祭礼歳時記シリーズ ⑪		
3月の祭り……………	星野 紘	22
我が県の文化行政		
“心のふれあいというおいを求めて”		
——岡山県の文化行政——……………	近藤信司	24
海外文化行政事情シリーズ ⑧〔CDI報告書から〕		
フランスの文化行政……………	松野 精	27
著作権シリーズ(21)		
著作権の制限		
——出所の明示と目的外利用——……………		29
国立劇場ニュース……………		31

三月の祭り

星野 紘

（文化庁文化財保護部無形文化
民俗文化調査文化財調査官）



春三月、学校では卒業式があり、役所、会社などの年度末にあたり、歳末の十二月とは別の意味で私達の日常生活の区切りをなす月となっている。季節的には桃の花に象徴されるように厳寒の冬は遠のいて水ぬるみ、生暖かな大気の肌ざわりの中で種々の花々の開花の便りを聞くのである。

ここに三月の祭礼歳時記として全国的に著名なもののいくつかを紹介してみたいと思うのだが、具体的に言えることの二、三を前もって付言しておきたい。一つは明治五年に太陰暦から太陽暦への暦の変更があったことよって、それ以来引き起こされた暦日と季節感との対応関係の混乱を指摘することが出来る。例えば初午、修二会をはじめ旧暦の二月の行事が、ほぼひと月遅れるかたちで、この三月に入っていること、あるいは雛祭は新暦の三月三日ということで今は誰も異存のない形となっているが、旧暦の三月三日は新暦でいえばもつと遅くならなければならないはずであるといった点である。二つ目は、この月の祭礼法会は何か季節としての特徴がつかみ

にくいという感がある。いやそれなりに特徴を見せたいのだが、それが一般的とはなっていないのだと言ふべきかもしれない。祭礼の華はい、うまでもなく京都の祇園祭をはじめとした夏祭りにあり、一方春、秋のお祭りも明確にそれぞれ祭礼時季として定着している。寺院の法会の方でも盆の施餓鬼とか二月の追儺会などは時季のはっきりしたものである。三月といえば誰しも年中行事の雛祭や、彼岸を思い起こすようにどうやらこの月の祭りは、各家々の祭り事、いわゆる年中行事の範疇のものの方が印象深いということのようである。とはいへ祭礼暦をくくって見ると各地の社寺ではこもこもに様々な執り行いが展開されていることを知る。以下それらの中からこの季にふさわしいと思われるものを二、三選り出して述べてみよう。

* * *

各地に広く散見するものの一つは御田植祭（神事）である。ここに掲載した写真はその中の一つで、埼玉県秩父市蒔田、桜神社三月三日の祭りである。春



御田植祭（埼玉県秩父市蒔田 桜神社）

事にすぎないのである。三月十三日の午前二時頃深夜に行われる。この前日つまり十二日の夜七時過ぎからお松明というこれまたこの行事の呼び物となっている次第がある。直径一m、長さ七m程の大松明が点火されて一本一本二月堂への登廊をかけ登って来ること十一たび、堂上に登り切ると堂を廻した欄干のところからこれが突き出され、屋根を焦さんばかりに火の粉が舞い上り、崖下でこれを天を仰ぐようにして見とれている群衆の方へ振りかかって来る。この火の粉を浴びれば厄除けになるんだという言い慣わしがあり、立すいの余地がない程に人々が詰めかけているのである。練行衆の内陣の中での行法時の立ち居振る舞いは、特定の日時には、走りとか達陣などという芸能史的にも重要な力強い行法をも見せるということで、格子越しに中のその様子を耳側立てている人々が多い。時には内陣の戸張りが巻き上げられて中も見透かせるが、多くは練行衆が突っかけ下駄のようなもの（差懸）という修二会独特の履物で堂内を駆けまわっているタンツ、タンツとい

* * *

うかん高い足音だけが中の様子を伝える。

赤い鳥居が何重にも連なっている各地稲荷神社の境内であるが、初午祭の折にはさらに赤い幟旗が何本も境内にはためき多くの参拝者が群をなしている。もとは旧暦二月初めの午の日にこれをとり行っていたのだが、暦の改変後に例えば新暦の二月八日になどという風に実際は季節を一カ月ばかり早める形に変更したところもある。その一方で旧暦の二月に相当する新のこの三月の何日かに執り行っているところもある。例えば愛知県豊川市の豊川稲荷のそ

の陽光うららかな神社境内を田圃に見立て、作りものの鍬で耕すまねをしたり、太い竹の棒（鼻取竹）につかまりかがむ者を馬に見立てて追いまわして田の代を掻く姿と見え、藁を苗に見立ててそれを挿秧して田植に擬したり等々稲作の作業過程を順次模倣的に演ずるのである。終りには餅を撒いて収穫の多かったことに喩える。稚戯にも等しいことに打ち興じている大の大人達に見物人はほほえみを禁じ得ず、さてこういつた呪いごとを今日まで繰り返させて来た伝統、そのわけとは一体何なのだろうなどと現代人は考え込んで立ち止まる。同様の祭りは、例えば鹿児島県始良郡霧島町の霧島神社では三月九日に、奈良市の春日大社では三月十五日に行われる。なおこの御田植祭はこの月に行われるばかりでなく、一月、二月には多くは田遊び、御田などと称して行われており、田植の頃などにもまた行われているのである。いずれにしてもこれらの趣意としているところは、どれもが実際の稲作作業に先き立つて、秋の実りの豊饒なることを念じつつあらかじめ豊作になった様などを思い描き、その祝意にひたるというものである。

* * *

この月の祭礼法会を代表し最も著名なるものはお水取りの名で親しまれている奈良、東大寺の二月堂の修二会であろう。京都や奈良の二月、三月の冷え込みはなかなか厳しいものがあるが、このお水取りが済めば春がやって来るのだなどという言い種が当近畿地方で言い慣わされていることはすでに周知の通りである。修二会とは二月に修される寺院での勤行という意味であるが、東大寺のそれは三月一日か

れは三月十七日、長野県飯田市の長谷寺は三月六日、宮城県岩沼市竹駒神社のそれは三月二十六日、三十一日などという風にである。この二月初初の午の日が稲荷の縁日となったのは京都伏見の稲荷神社の祭神が、山上の三ヶ峰にお降りになったのがこの日である（和銅四年）からだといわれている。しかし農村部の民俗伝承などでは稲荷神社とは無関係にこの日を理解している向きもあり、午の日ということから単に牛馬の祭日としているところがある。例えば鹿児島県始良郡人町の鹿児島神社では、三月六日の初午祭に鈴懸馬というのがあって、御幣や色とりどりの布・鈴などを付けた馬（シャンシャン馬ともいう）が神前に参拝する。終って馬蹄等の賑わいがある。

* * *

右に触れたものの他にも名の知られた祭礼は数多いので思いつくままに列挙して置く。新潟県南魚沼郡大和町浦佐毘沙門堂の三月三日の裸押合祭、茨城県鹿嶋市鹿嶋町鹿嶋神社の三月九日の祭頭祭、奈良市春日大社の三月十三日の申祭、滋賀県近江八幡市日牟礼八幡宮の四月中旬土・日曜の左義長祭、静岡県志太郡大井町藤守の三月十七日の田遊び、和歌山県伊都郡高野町金剛峰寺の三月二十一日の正御影供、茨城県那珂郡東海村村松虚空蔵堂の三月二十五日、四月五日の十三詣その他である。

文化庁月報



1981-3

No.150

【表紙】

城の見える風景

バルトロメオ・モンターニャ画

解説は19ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

昭和55年度芸術祭を終わって	
——芸術祭音楽部門レポート——	館野善二 4
演芸の妙味さまざま	
——芸術祭の大衆芸能部門(一部)レポート——	小島貞二 6
佐賀県立九州陶磁文化館の現状と将来	田中寿義雄 8
〔随想〕	
北京探訪	濱田 隆 11
〔報告〕	
在欧トルファン文書の調査	
——昭和55年度文部省在外研究員東独在外研修報告——	
鬼頭清明	13

文化庁ニュース

昭和56年度宗務課関係事業計画の概要	16
「マチス展」	16
「石黒宗麿展——陶芸の心とわざ——」	17
「中国・中山王国出土文物展」	18
〈新設法人紹介〉	
財団法人毎日書道会	19

祭礼歳時記シリーズ ⑬

4月の祭り——四天王寺の聖霊会——	榎本由喜雄 20
-------------------	----------

海外文化行政事情シリーズ ⑨ [CDI報告書から]

フランスの美術館管理機構	松野 精 22
--------------	---------

著作権シリーズ⑫

著作権制度上の課題	24
-----------	----

文化庁月報昭和55年度総目次	26
----------------	----

文化庁日誌	28
-------	----

伝統芸能講習生募集	30
-----------	----

国立劇場ニュース	31
----------	----

四月の祭り

四天王寺の聖霊会



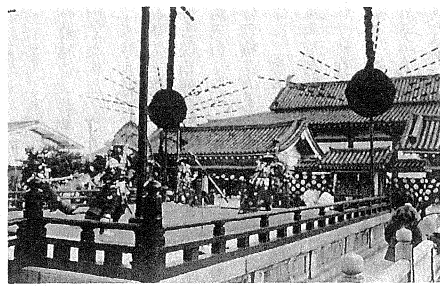
榎本 由喜雄

(文化庁主任文化財調査官)

「まつり」といふことを事典で調べて見ると、次のように書いてある。「神霊をよび迎えてこれに供献侍坐し、それを慰めなごましめること。すなわち生きている人に対するが如くに清浄な身心で神霊を饗応し、神霊に奉仕することである。この考え方は家の小さな祭りから、ムラの年中行事といわれるものや、さらには大小にかかわらず神社の祭りにおいても同じである。仏教でもいろいろな名目とけや死した人々の霊を「まつり」と同じように迎え、これに供献侍坐し、それを慰めなごましめる行事が各地の寺院に数多く伝承されている。祭礼といえは神社のまつりと思うが、これらの仏教関係の諸行事も広い意味での「まつり」と考えてよいものが多い。四天王寺の聖霊会もその一つである。

四天王寺の聖霊会は大阪市天王寺区元町に建立されている四天王寺の最も重要な法会である。

仏教が日本に渡来した頃、崇仏派である蘇我氏と排仏派である物部氏とが争ったが、聖徳太子は仏教をあつく信仰され、四天王に祈願され、物部守屋に勝ったので、五八七(用明天皇二年、玉造の岸(現在の大坂城付近のこと)に四天王像を安置した。これが四天王寺のはじまりといわれている。後に五九三年現在の地に移された。当寺はいつの時代にも



落慶慶讃 聖霊会舞樂大法要 舞樂太平楽(10月22日)

このような大法会が勅令として執行されたが、諸役を仰せつかる人々はいずれも四天王寺近辺の農家や町家の人々であり、いわゆる僧侶一体の法会であった。現在でもこれらの人々の子孫の人々が聖霊会の諸役に進んで奉仕している。

昭和五十一年四月二十二日に執行された聖霊会はちょうど国の重要無形民俗文化財に指定された記念の年で、長らく断絶していた散華大道をはじめて各種の古儀を復興しているの、これを参考にその概略を見ることにする。

聖霊院より聖徳太子の御影を鳳輦に安置し、大導師、右方楽人、諸役、菩薩、獅子等が供奉する。また別に、金堂の舍利仏を玉輿に奉載して、副導師、左方楽人、諸役、菩薩、獅子等が供奉し、いずれも別々に行進して、最後は仁王門(中門)前で出会い、ともに右舞台正面に向かう。石舞台を昇降して、六時堂の正面に太子の御影を安置し、東西の間には、仏舍利奉安の玉輿、太子の鳳輦を置きたてまつる。

創建者である聖徳太子の御理想である仏教精神の発揚と社会救済事業を行ってきた。

四天王寺には古くから楽所が設けられていた。この楽所の楽人・舞人はいずれも聖徳太子の重要な家臣であった秦河勝の子孫であるといわれている。いづれも四天王寺の近くにひとかなまりとなつて住んでいたもので、この地を伶人町といっている。(伶人とは楽人・舞人の意である)この楽所を天王寺楽所といい、京都や奈良の楽所とともに三方楽所といつて重要視されていた。四天王寺の聖霊会には天王寺楽所の楽人達が管絃や舞樂を勤めた。

しかし、明治初年に三方楽所の楽人達を政府が東京の宮内省に召したので、その後には天王寺楽所の伝統は、大阪に残存した楽人達を中心に保持され、明治十七年、これらの人々により「雅亮会」が結成され、その後は四天王寺の聖霊会の管絃や舞樂は雅亮会の人々により、引き継ぎ伝承され、今日に至っている。

四天王寺では、古くから年中の法会に必ず雅樂を奏したり、舞樂を舞つたりしてきた。特に二月十五日に執行される「涅槃会」や同月二十二日に執行される「聖霊会」、さらに九月十五日に執行される「念仏会」は特に大きなものである。この三法会の中で

これが「道行」、「舞台前庭儀」で、特に「道行」から「舞台前庭儀」に至る間、楽人は歩きながら道楽(みちがく)と称する進行曲を演奏する。

次が「両舎利入堂」で大導師(一舎利)、副導師(二舎利)が六時堂に入堂する。一舎利は管長、二舎利は副住職が担当している。つづいて「総礼伽陀」という(みかた)で衆僧が舞台上で「伽陀」という法儀の序曲、終曲として重要な声明を唱詠し、終了とともに衆僧が礼拝を行うので「総礼」という。これが終わると「衆僧入堂」、「諸役別座」となり、衆僧は六時堂内に入り、楽人は楽舎に入り楽舎の幕が揚げられ、その他の諸役はそれぞれ定位置に退る。このとき「集会乱声(しゅうえらんじょう)」で、左右の楽舎から「小乱声(こらんじょう)」が奏される。いよいよ法会の開始である。まず舞樂「振鈴(えんぶ)」である。左方、つづいて右方、さらに左右両方の舞人が鈴を振って舞う。悪戯を払って、舞台を清浄にする。次は舞樂「蘇利古(そりこ)」で紙で作った人の顔を抽象化した図柄の面をつけた五人が舞う。この舞の間に堂内で「御上帳(みじょうちやう)」、「御手水(みちやうづ)」といつて堂内の聖徳太子の御影を開き、聖水をおささげする儀式がある。雅樂「傾盃楽」が奏される中に両舎利が六時堂と舞台の間の高座に昇り、「諷誦文」、「願文」を微音で唱える。つづいて雅樂「十天楽(じってんらく)」の演奏の音にのつて「伝供(てんぐ)」がある。左右両楽舎の間に御供がある。ここに安置された供物を菩薩、迦陵頻、胡蝶等の舞人が中心となつて舞台をリレー式に運び、六時堂壇下に待機する僧侶に伝送する。終わると「菩薩」、「獅子」を舞う。「大輪小輪(おおわこわ)」といつて舞台の内を二回、菩薩と獅子が回り歩く。次に舞樂「迦陵頻」を幼童四人が舞う。つづいて雅樂「賀殿急(かてんのかきゅう)」を奏する中で、「一舎利が「祭文(さいもん)」を読みあげる。雅樂「仙遊霞(せんゆうか)」の楽の音につれて、

も大規模で特に重要なものは「聖霊会」である。聖霊会には聖徳太子の御命日である旧暦の二月二十二日に聖徳太子の聖霊をおなぐさめするために執行される舞樂法要で、四天王寺では一千年の歴史を有せられ、国家の大事の年以外年には毎年かきさずに修せられきた。一般の大阪の人々は俗に「おしやうらいさま」と呼んで親しんでいる。明治以後は、毎年二月二十二日ではなく、四月二十二日に執行されている。

四天王寺の講堂の北側には戦後再建された鉄筋コンクリート造りの楽舎が東西に並んでおり、その北に亀の池がある。池の岸は石で固められている。池の中央に広い石橋があり、その上に石舞台があり、正面の六時堂に備えられている。石舞台は国の重要文化財に指定されており、朱塗りの高欄をめぐらしている。その広さは東西十二メートル、南北十三メートルで、南北の二方に左右二つの階段が設けられている。また、聖霊会の当日は舞台の四隅に赤い曼珠沙華を表徴する、高さ約四メートルの赤い紙花が立てられ、これに燕の作りものを無数に吊り下げる。前記の楽舎は管方(舞樂のための雅樂を奏する人々)が着座し、音楽を奏する場所、左方の管方、右方の管方と二つあるので、東西に楽舎が二つある。舞台の南北に、いずれも左右に階段があるのは、舞臺に左方の舞樂、右方の舞樂と二大別してあるので階段の昇降は左方の舞樂は左の、右方の舞樂は右の階段を使用する。六時堂は桁間約二十二メートル、棟高約十六メートルで六時の動行のために建立されたものである。

前記の如く聖霊会には舞樂大法会で声明、雅樂・舞樂が渾然一体となつた法会で、舞樂四簡法要の形式で執行される。これは唄(はい)、散華(さんげ)、梵音(ぼんおん)の、錫杖(しゃくじやう)の順序による四種の声明と作法とをともって執行される法要で、しかもこれらの間に雅樂や舞樂が演じられるのである。

堂内の声明を唱詠する僧侶が舞台上に登場する。(唄屋(はいとく)、散華(さんげ))を唱詠し、散華で紙製の花を散らして諸仏勧請、華鬘供養する。終わると獅子、菩薩、楽人、諸役等が左右に分かれ、「大行道(だいぎやうだう)」を行う。この先導をする左右の楽人の頭二人が舞台上に入り、舞樂「一曲(いつききょく)」を舞う。退場すると舞樂「延喜楽(えんぎらく)」を四人の舞人が舞う。終わるとともに「延喜楽」の音につれて声明を唱詠する僧が再び堂内より舞台上に上り、「梵音(ぼんおん)」、「錫杖(しゃくじやう)」を唱詠する。錫杖では手に持った錫杖を文の終わりに振ることになっている。つづいて雅樂「長慶子(ちやうけいし)」の楽が奏される中に「両舎利降座」があり、一舎利と二舎利は左右の高座からおられる。古くは当寺の聖霊会の舞樂は振鈴から始まり、二十五曲を舞うことになっていた。これは早朝から始めて終わるのは深夜になるほどであった。ちょうど日没の頃に太平楽を舞うので、この舞で舞人が太刀を抜くところで、舞台周辺の篝火が点火された。これは現在でも慣例となっている。このとき、六時堂では太子の御影を巻き、諸員が供奉して還御なさる。そしてなおも舞樂をつぎつぎに舞つたのであるが、現在では諸種の事情から舞樂「還城楽」を舞つて、この大規模な聖霊会は終了する。

以上の如く四天王寺の聖霊会には仏教の法会に声明と雅樂が渾然一体となつて用いられた最も大きな仏教芸術の一つである。吉田兼好が徒然草の中で「何事も辺土は賤しくたくなれども、天王寺の舞樂のみ都に恥ぢず」と書かれている。あるいはこの聖霊会を参拝してのことであろうか。昭和五十一年、国は「聖霊会の舞樂」として重要無形民俗文化財に指定した。

(そのもと ゆきお)

文化庁月報



1981-5

No.152

【表紙】

肘かけ椅子に坐る裸婦

パブロ・ピカソ画

解説は24ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

彫刻生活半世紀……………向井良吉 4

サル雑学余聞……………中野美代子 6

文化行政について思うこと……………安達健二 8

報告 ヨーロッパの文化施設を訪ねて…………… 13

文化庁ニュース

昭和56年度子ども芸術劇場実施計画……………17

昭和56年度青少年芸術劇場実施計画……………18

昭和56年度芸術家国内研修員決まる……………20

文化庁優秀映画並びに子ども向けテレビ用
優秀映画製作奨励金交付作品決まる……………21

国立歴史民俗博物館の設置……………22

重要文化財(建造物)の新指定……………22

重要伝統的建造物群保存地区の新選定……………24

祭礼歳時記シリーズ ⑬ 6月の祭り

磯部の御神田……………榎本由喜雄 25

海外文化行政事情シリーズ①

イタリアの文化行政……………松野 精 26

我が県の文化行政——千葉県——

芸術文化活動の振興と伝統文化の継承……………斎藤 浩 28

国立劇場ニュース……………31

稲の原生地は我が国より南方の暑い地方と考えられているが、日本に渡来した経過は明らかでない。しかし、稲作の歴史は古く、我が国で稲作の行われたことは弥生式の古い時代からその証拠がある。この遠い古代から、毎年絶えることなく稲作が続けられ、改良に改良が加えられ、今日の稲作となってきたのである。この長い年月の間には、あるときには不作で、人々が不安と焦慮にかられた時代があり、またあるときは豊年万作で、人々が喜びの心を

祭礼歳時記シリーズ ⑬

六月の祭り

磯部の御神田

榎本 由喜雄

(文化庁主任文化財調査官)

をおさえ難く、笛、太鼓の囃子につれて踊り狂った時代もある。しかし米は主食であるが故に尊いばかりではない。古くは米を主食とする者は一般の人に限られ、一般の人は一年の中で、特別な日——ハレの日——にのみ食していた。この日以外の日には、一般の人は他の穀物を食していたのである。米は食料であるばかりでなく、生命を養う霊力あるものとして重要視されていた。このため、戦前には、地方によっては重病人の枕辺で、竹筒に米粒を何粒か

入れたものを振って、米粒の音を病人に聞かせたということである。この米粒の音を病人が聞くことによって、新しい生命力を養う力を得て、元気になると考えられていたのである。このように重要視されていた米を作ることは、われわれの祖先達にとつてたいへん難しい問題であった。もともと稲は前述の如く我が国より遙か南方の地域が原産地である。これを日本に移植するためには長年月の絶えざる努力と研鑽が積み重ねられた。思えば米の生産は約一か年

不作になってしまふ。

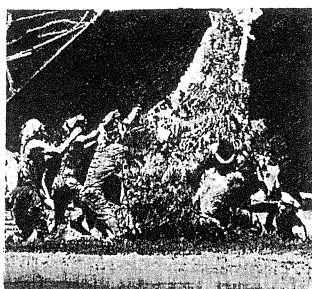
昔は科学は進歩していない。一所懸命に働く上に、さらに神に豊作を祈ったのである。この祈りは年の初めには「田遊び」、「田植踊り」などとなり、また実際の田植の時期には「お田植神事」、「囃し田」、「花田植」、「大田植」となり、収穫の際には「豊年祭り」などとなり、豊作の際には「豊年の豊作祈願」となつたのである。勿論こればかりでなく、時期を捉えてあらゆる機会に豊作を祈つたのである。毎年六月二十四日に執行される三重県志摩郡磯部町の「磯部の御神田」も「お田植神事」の一つである。

起源に関しては明らかでないが、相当古くから行われたらしく、香取神宮、住吉大社の御田植祭りとともに著名である。

早乙女六人と立人六人、そのほかの人々が、当日祭宿を出て神社まで道行する。その後御田へと向かう。その順序は、えぶり指二人、立人六人、早乙女六人（先頭の者を「奥宮」といい、次の者を「さい若」という）、さらに指二人、太鼓打ち一人、笛二人、大鼓一人、小鼓一人、謡六人である。立人は、菅笠を戴き、中形の襦袢を着し、紺の股引に手甲をつける。早乙女は、十二・三歳から十五・六歳の少女で、顔に白粉をつけ、まゆをひき、菅笠をかぶり、モスリンの派手な襦袢に紫色の脚絆をつける。太鼓打ちは七・八歳の童男で、かつらを被り、作り眉をして少女に扮する。

囃方は、青年男子が受けもち、素襖烏帽子をつける。

御田には、長さ三丈ほどの青竹が杭にしばって立てられ、竹の先端には、刺藪がつけられている。立人、早乙女が御田に入り手をとって苗場を三周半し、苗取りが始まる。苗取りが終ると、立人が青竹を杭より解き、三度刷いで御田の中心に向かって倒す。近郷漁村の青年たちが裸になって田に入り、竹の奪い合いを行う。その争奪の有様は、



竹取りの行事

頗る勇壮である。その竹をもち帰って船霊に祭り、大漁満足、海上安全のお守りにする信仰がある。

竹取りが終るとお田植となる。一列に並んで植えながら退いて行く。その間、囃子方は奏している。半分植え終えたころ、いったん休み、さらに方二人が田の中で踊る。これを「早取舞」（さいとりさし）という。この間に一同、わかめの肴で小宴を開く。さらに残りの半分を植え終る。その後、伊勢宮への練り込みの踊りがあつて終る。



1981-6

No.153

【表紙】

櫻の森の道

ヤコブ・ファン・ロイスダール

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

截金——仏画から工芸へ……………斎田梅亭 4

上田墨縄堂の事ども……………上田淑宏 6

文化行政について思うこと②……………安達健二 10

随想

西ドイツ・アメリカの埋蔵文化財保護瞥見…坪井清足 14

文化庁ニュース

昭和56年春の勲章受章者決まる……………16

昭和56年春の褒章受章者決まる……………16

著作権審議会第32回総会開催……………16

昭和56年度都道府県宗教法人事務主管課長会議開催さる…17

史跡の指定等……………17

国宝・重要文化財(美術工芸品)の指定……………18

美しく豊かな言葉をめざして……………19

募集 舞台芸術創作物品……………20

資料

昭和55年度民間芸術等振興費補助金

の交付状況について……………22

解説 宗教法人の管理運営の適正化……………安藤幸男 24

海外文化行政事情シリーズ⑫

ドイツ・韓国の文化行政……………松野 精 26

国語シリーズ② 「語法」に関する問題……………29

新設法人紹介

財日本金属造型振興会

財美術愛好会サロン・デ・ボザール……………21

祭礼歳時記シリーズ⑭……………28 国立劇場ニュース……………31

「祇園本縁録」によると、清和天皇の貞観十一年（八六九）に、天下に疫病が大流行したので、勅命により卜部日良麻呂がこれを判じて、「疫病の原因は荒ぶる靈のたたりである。」とした。この荒ぶる靈を鎮めるために、六月七日に、長さ二丈の霊を六十六本立て並べ、さらに同月十四日には、洛中の男子や洛外の農家の男子が神輿を奉じて神泉苑へ送った。これが京都の祇園祭りの

ある群小の疫神を屈服する方面に発揮して貰おうとして、京都の八坂神社ではこの両神を祭った。毎年六月には盛大な祇園祭りが執行され、神輿や山鉾の巡行がある。現在は一か月ずらして七月に執行されている。」

時代の経過は各地に都市の発生を促し、京都の文化や宗教の一つとして祇園祭りも各都市に影響を与え、祇園祭り、天王祭りなどの名称で各地で祭ら

祭礼歳時記シリーズ⑭

七月の祭り 戸畑祇園大山笠

榎本 由喜雄

（文化庁主任文化財調査官）

はじまりであるといっている。この疫病のもとである荒ぶる靈を鎮めるためには、これらの荒ぶる靈の中でも最高の力を持つていると考えられていた外来の行疫神である「牛頭天王」、わが国古来からの神である「素戔鳴尊」である。この両神はいずれも怒りの強い心を持ち、非常に荒々しい神である。この両神を祭り、両神の持っている強い力を荒ぶる方面でなく、両神の配下に

が執行されるようになった。

戸畑祇園大山笠は福岡県北九州市戸畑区に鎮座する浅生八幡神社と菅原神社（天願寺）と中原八幡宮の三社にそれぞれ須賀大神が併せ祭られているが、七月十三日、十四日、十五日に執行されている。この須賀大神の祭礼に登場する大山笠である。

その由来を尋ねると、享保二年（一八〇二）に鳥旗村（現在の戸畑区）に

悪病が蔓延し、多数の死人が出て、村中が非常な苦しみにおち入った。この地の祭神である須賀大神に、この悪疫を退散させていただきたいと、村人がこぞって祈願したところ、たちまちのうちに悪疫が平癒した。そこで翌年の享和三年に村人達は山笠を作り、盛大に願はどきの行事を執行したのが、戸畑祇園大山笠の起原であると伝えられている。

明治以降、戸畑も発展膨張し、自然も人も風習も変遷してきたが、戸畑祇園大山笠だけは戸畑の最大の年中行事として、市民あげてその保存に尽力しており、昭和五十五年には国の重要無形民俗文化財として指定されている。

七月十四日の早朝から、幟山笠の飾りつけを行い、正午には八幡神社に集合し、祭儀が執行され、山笠に御神霊をお移しする。午後一時から大山笠と約五十台の子供山笠がこれに供奉し、神輿を中心に御神幸が行われ、「お汐井汲み」がなされる。同日の夕刻から、ビラミッド型の提灯大山笠の競争が行われる。大山笠には笛、鉦、太鼓、合せ鉦（ちゃんぶく）による囃子があり、この囃子につれて大山笠が進む光景はまことに豪華である。

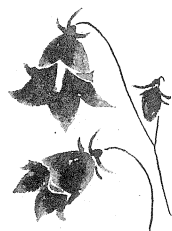
大山笠は幟大山笠ともいわれ、現在四基あり、中には文政十二年（一八二九）の銘を刻んだ勾欄の擬宝珠や慶応

年間（一八六五、六八）に作られた切幕をはじめ、山笠を飾る水引きなど、豪華なものが伝えられて、今も祭りに使用されている。

祭りには、山笠に畳は台上に十二本の幟を立て、前面に前花・背面に見送りを飾り、台の周囲に金糸、銀糸の幕を張りめぐらし、勇壮な囃子にのり、



若者達がこれを担いで市中を練る。夜は大山笠に三百九個の提灯を積み重ねて飾られた提灯大山笠となり、囃子にのって夜の町を練る。この提灯は地上約十メートルの四本の櫓に十二段にわたってとりつけたもので、重量は二トン半であるといわれる。



1981-7

No.154

【表紙】

聖ペテロの解放

ヘンドリック・テルブルッヘン

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

ニューヨークの写真美術環境……………菅 十一郎 4

国立歴史民俗博物館について……………中田 和夫 6

随 想

奥浜名湖の印象……………林屋辰三郎 8

民事裁判に現れた家元制度(Ⅰ)……………大 家 重夫 10

文化庁ニュース

第5回全国高等学校総合文化祭の開催……………13

昭和56年度(第36回)芸術祭の開催計画決まる……………13

第11回移動芸術祭秋季公演……………17

9月から全国各地にかけて

重要無形文化財の新指定等……………19

昭和56年度著作権講習会等の開催……………21

資 料 日本における宗教団体の概況(Ⅰ)

…文化庁文化部宗務課 2

我が県の文化行政

魅力ある地域文化の創造をめざして……………鵜橋 寛 25

国語シリーズ③

「外来語」に関する問題

29

新設法人紹介 (財)新田次郎記念会……………21

祭礼歳時記シリーズ⑮ 28 国立劇場ニュース 31

青森市の「ねぶた」、弘前市の「ねぶた」、仙台市の「七夕」、山形市の「花笠踊り」とともに秋田市の「竿灯」は、東北地方の五大まつりとして著名であるが、特に秋田市の「竿灯」は古い信仰をよく伝承している。

江戸幕府では、文化十年（一八一三年）祐筆の屋代弘賢が計画して、各藩の風俗習慣について調査を実施した。その方法は「風俗問状」と称する印刷物を作成し、各藩の知人を介してこれを配布し、その回答を求めた。今日「風

太鼓二ツ、三ツ乱調に打ちて、一町きりに若き者群れ従う。まず、通町の橋中へ練り出て、それより町々を渡るなり。町々より一ツ宛出す。また此の夜、廓の内外ともに、児童十歳ばかりまでは手ごとに品々の灯籠を持ちて遊び、家ごとに門に灯籠を掛ける。……」

この「眠り流し」の記事の内容は現在の「竿灯」とまったく同じであることがわかる。もともと「眠り流し」は睡魔を払う意のもので、これから農耕

祭礼歳時記シリーズ(15)

八月の祭り 秋田の竿灯まつり

榎本 由喜雄

(文化庁主任文化財調査官)

「風俗問状答書」として残っているものは十数種しかないが、この時代の風俗習慣を知る上で貴重な文献とされている。この中に「秋田風俗問状答」が文化十一年十二月の奥付で、那珂通博によって書かれている。

「六日の夜、眠ながしと申す事風俗にて候。廓外の町々よりなし出す。長き竹に横手を幾段も結ぶ。大なる灯籠三十、四十、五十もつける也。多力の者を選びて、一人に持たす。手代りの三、四人添て、其の尻之に

の仕事が多忙となり、労働も激しく、暑さも厳しくなっていくので、ねむけを退けようとするのであるといわれる。この目的のために青森市の「ねぶた」、弘前市の「ねぶた」や秋田市の「竿灯」も行われるのである。

「竿灯」は毎年八月五日から七日まで盛大に執行されるが、竿灯という名称は明治になつてからのもので、それまでは「眠り流し」といって旧七月六日の夜に行われていた。

竿灯の歴史は古く、宝暦の頃に始ま

る。天明の飢饉を経て、その五年後の寛政元年に佐竹藩は大豊作となり、また佐竹義和のお国入りの喜びが重なり、これを機にさらに文化年中頃から竿灯は盛大に執行されるようになった。

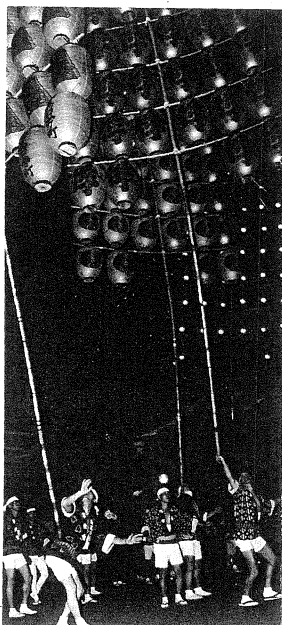
長い竹竿に九本の横竹を結んで、これに四十六個の提灯を吊るし、これを半天を着て、ももひきをはき、鉢巻をきりりとしめた若者が、へドッコイショー・ドッコイショー オエタサ オエタサ ドッコイショー ドッコイショー 根っこ ツイタ オエタサの掛け声（この掛け声は、古老の言によれば、昔は次のように掛けられたそうである。へ稲しように 稲しように 稲おい（え） たさ稲おい（え） たさ）と笛、太鼓の囃子につれて、腰・肩・額・拇指・掌などに竿灯をのせて、両手を離し、提灯の火を消さないで竿灯を常に安定させて操る。高さ十二mから十三mにもおよぶ竿灯を静止させることは至難な技である。いろいろな姿で拍子をととり、泳ぐように竿灯を操る。

竿灯には大若・中小若・幼若の三種

がある。これらはいずれも提灯の大きさが違う。大若は六十四cm×四十五cm、中小若は四十八cm×三十六cm、幼若は三十cm×二十一cmである。特に大若は重量が六十kgにも及んでいる。

古くは各町がそれぞれ町内の氏神様、鎮守様に五日の早朝に参拝し、御幣をいただいたが、竿灯会が発足してからは、各町内の代表者が早朝、千秋公園の八幡神社に参拝し、御幣をいただき、これを竿灯の先端につける。この御幣のついた竿灯で町内を巡行することにより、町の穢れを祓い、七日の早朝、御幣を竿灯から取りはずし、この御幣を新川橋から雄物川に流している。これを「御幣流し」といっている。

青森市の「ねぶた」や弘前市の「ねぶた」も最後の日に海や川に流しているが、現在は諸事情で流すことをやめている。しかし秋田市の「竿灯」は今でも「眠り流し」の根本思想である穢れを祓い、これを流すという昔からの考え方にのっとって「竿灯」を執行している。



文化庁月報



1981-8

No.155

【表紙】

水 浴

モーリス・ドニ

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

「うたの生活」の記録木村 重利 4

高知県における方言収集緊急調査について
...土居 重俊 7

報 告

1873年の澳国万国博覧会の周辺樋口 秀雄 9

随 想

レオナルドに会うの記前川 誠郎 12

民事判例に現れた家元制度(Ⅱ)大家 重夫 14

文化庁ニュース

国立美術館所蔵内外美術名品展の開催について...18

著作権審議会第33回総会開催.....18

昭和56年度使用教科書等掲載補償金額決まる.....18

第5回日本民謡まつりの開催.....19

美術展20

東山魁夷展

現代ガラスの美

佐藤忠良展

資 生涯を通じ自ら学び、活動する意欲と
料 能力の重視文部省大臣官房企画室 23

日本における宗教団体の概況(Ⅱ)
...文化庁文化部宗務課 25

国語シリーズ④

「送り仮名」に関する問題 29

新設法人紹介

(財)日本オペラ振興会19
(財)新星日本交響楽団

祭礼歳時記シリーズ⑩ 28

国立劇場ニュース 31

国鉄の外房線、安房鴨川行きの特急に乗車すると、約一時間三十分で上総一宮駅に到着する。駅前のにぎやかな軒並みの中に大きな鳥居が見える。ここが上総一の宮のはだか祭りである。玉前神社である。

玉前神社は千葉県長生郡一宮町一宮に鎮座され、社伝によると、海神の息女、玉依姫命（神武天皇の御母）を祭神とする。古くから近隣の諸地域の人の信仰の中心で、神龜三年、聖武天皇の御代・上総一宮の称号を賜わっているほどで、さらに延喜五年、当社は

祭礼歳時記シリーズ⑬ 九月の祭り

上総一の宮のはだか祭り

榎本 由喜雄

（文化庁主任文化財調査官）

延喜式神名帳に記載されている。いわゆる「式内社」である。

一宮町は、南北約五キロメートルで、「く」の字の形状をなし、総面積は二・三・六五平方キロメートルである。東方を流れている一宮川は、その源を長南町に発し、茂原市、睦沢村をうろちている。町全体を見ると丘陵地帯と海岸に向かって平坦状になっている平地とで形成されている。玉前神社はこの一宮町のほぼ中央にある。

玉前神社には年間を通じていろいろな神事が執行され、その中で一宮町の人々と関係の深いものは、年末、年頭の参拝、二月三日の節分祭、四月十三日の春祭り、九月十三日のはだか祭りがあるが、特にこの「はだか祭り」は一宮町の最大の祭りである。正式には「玉前神社例大祭十二社まつり」という。古くより執行された祭り、元禄、享保、明治末期と祭りの構成・規模などを比較して行くと、次第に縮小し、戦後に祭りの衰微はあったが、再び活気を取り戻している。

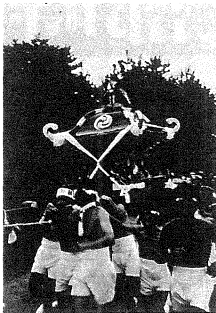
この祭りは古例では八月十三日に執行されていたが、現在は九月十三日に執行されている。祭りにさきだち九月八日、玉前神社の氏子の各地区で祭りの幟を立てる。ついで、いよいよ同月九日より神職一同が社務所に参籠して潔斎に入る。なおこのときは、毎日早朝、海浜で禊ぎを行う。潔斎は十三日まで継続する。特に十一日は午前三時に神職が揃って海浜で潔斎を行う。これはこの日に「火を改める」からである。六×六十センチメートルの桧材二個を並べて置き、その間に同じ材質

の丸木（径十五センチメートル×長さ三十センチぐらい）を挟んで、それに麻縄をまといつけて、その末端を手にし、二人の者が左右に分れて桧を摺り、丸木材が回転することによって角材との間に火を出させ、これを点して火種とするのである。無論この火は神聖なものであるから、神事以外には使用しない。江戸時代の終わりまでは九月十一日にこの方法で火をおこし、一年間用いていた。次に同十二日には神輿や神具の清洗が行われる。これを御漱祭り（みすすみまつり）といっている。終って神輿は社殿に安置され祭典が執行される。氏子から餅、赤飯などをつめた重箱が神前に供えられる。古く氏子が神社に参籠したときの食糧がこのような形で民俗として残っているのであろうといわれている。

いよいよ九月十三日、祭りの当日である。午前十時から祭典が執行される。同町内の玉垣神社（下之郷）と三宮神社（北山田）の神輿に到来し（午後二時頃）、安置される。玉前神社の神輿の祭典が終了すると、九十九里浜の釣が岬へ神輿の渡御となる。草分馬、行列掛、猿田彦、太鼓、真神、祓主騎馬、錦旗、鉦、太刀持、神馬、称宜騎馬、大宮、官司騎馬、後乗、雑仕らが列をなして進行する。町内を除行し、神門まで行き、ここから猿田彦、太鼓、真神、錦旗、鉦は列を離れ、他の神輿の一行は神門より疾走し、釣が岬に向う。釣が岬では玉前神社の同系神社（玉依姫命の眷族を祭る八社）の神輿と旧三十数か町村の氏子が裸に近い姿で九十

九里の浜辺を疾駆する。正に圧観である。釣が岬で神事が執行され、再び神輿は玉前神社へと向う。神門で猿田彦、太鼓、真神、錦旗、鉦などが迎え、若宮のみ先導して神社へ還御される。大宮は町内を一巡して、還幸される。神社で還御祭があつて祭りは終了する。なお、この神輿をかつぐとき、声自慢の者が「玉前神社神輿唄」をうたう。

上総一の宮玉前様の ヨイ ヨイ
ヨイ ヨイト
裸祭りは ヨーオー 日本一

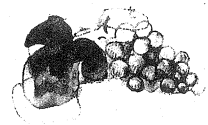


ヤー ソソコー ヤアー ソソ
コー ヤア ソソコー ソソ
コー ヤアー
（以下、囃子ことば略）

裸祭りの玉前様よ 十二社神輿が
磯に舞う

一の宮よいと松原続き、神の集
まる釣が岬

これにつれて裸の若者が神輿をかついで練って行き、囃子ことばをいっせいに唱和する。



1981-9

No.156

【表紙】

自画像

マリー・ジュヌヴィエーヴ・ブリアール

解説は17ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

家庭内録音・録画に関する著作権問題

…吉田 茂 4

文化財保存修理所の1年…小山 忠男 7

随想

鋳金一すじ……………香取 正彦 10

報告

イクロムの保存科学コースを受講して

…中村 康 13

文化庁ニュース

全国・ブロック別民俗芸能大会について……………16

昭和56年度包括宗教法人等管理者研究協議会
(京都会場)開催さる……………17

文化庁企画・提供「美をもとめて」の放送予定…18

美術展……………19

ムンク展 現代ラテン・アメリカ美術と日本

資料

文化行政の概況

…文部省大臣官房調査統計課 22

日本における宗教団体の概況(Ⅲ)

…文化庁文化部長官事務課 26

国語シリーズ⑤ 「仮名遣い」に関する問題 29

新設法人紹介

(財)スターダンサーズ・バレエ団……………21

(財)合唱音楽振興会

祭礼歳時記シリーズ⑪ 28 国立劇場ニュース 31

兵庫県加東郡社町上鴨川に鎮座する住吉神社では、毎年十月四日・五日に宮座の祭りが執行されるが、このときに宮座の制度のもとに古くから伝承されてきた神事芸能が宮座の人々により舞われる。これらの神事芸能は、わが国の中世において演じられた田楽、能舞などの芸能の遺風をよく伝えるもので、わが国の芸能史上重要な価値を有すると認められ、昭和五十二年五月十七日、国から重要無形民俗文化財として指定された。

社町は兵庫県のほぼ中央よりやや、東

祭礼歳時記シリーズ⑬ 十月の祭り

上鴨川住吉神社の神事舞

榎 本 由喜雄

(文化庁主任文化財調査官)

南に位置し、金物で著名な三木市、そろばんで著名な小野市、綿布で著名な西脇市が近接し、交通は中国縦貫道の開通により、新幹線の新大阪駅から、また国鉄の大阪駅からバスで約一時間十分で社町に到着する。此处から住吉神社までは自動車で約十分である。

祭りは十月四日の宵宮、翌五日の本祭りで執行される。この祭りの特色は宮座制により行われることである。宮座とは、一般的に、神社の氏子が平等に権利義務を持つて神祭りに参与するのではなく、氏子の中の一部の者が特

権的に神事に与るもので、わが国の中世後期（十五世紀）頃から行われてきたものである。宮座に關係している人は、この特殊な祭祀形態を持ち伝えることに誇りを持ち、自分達が進んで神への奉仕に従い、また祖父、父子、いと積極的に伝承してきた。宮座とは神事を主宰し、また鋪設に当るものを出す団体である。この住吉神社の祭りにも宮座が活躍する。

宮座の神役は若衆、清座、年寄の段階があり、まず男子十歳で新人となり、若衆に入る。清座になるのは二十歳前

後で、二十八、九歳で清座を抜けると「年寄」となる。この神事舞は若衆が演じる。宮座に入り得るのは長男に限られ、次男、三男は「祇園座」を組織して祭りの手助けをする。獅子をまわすのも、この「祇園座」の役であった。

四日の宵宮には神社の拝殿で「神楽」、「りよんさん」、「獅子」、「田楽」、「扇の舞」が舞われ、「村うけ」、「願濟」正規の上述の神事舞を略式に、あるいはテンポを早くして舞う）が多く奉納される。五日の本祭りには「りよんさん」、「獅子」、「田楽」、「扇の舞」、「高足」、「い

ど」、「万歳楽」、「六ぶん」、「翁」、「宝物」、「冠者」、「父の尉」が舞われる。舞は四日、五日とも舞堂（間口三間、奥行約二間）の前の地上に荒席を一枚敷き、この上で舞う。宵宮には舞堂に幕を張らないが、本祭りには幕を張る。これは宵宮には「翁」がないが、本祭りには「翁」が舞われるので、正式に幕が張られたのであろう。

宵宮の神楽は拝殿に向って左の建物の中で舞われる。二間四方で左手に炉があり、火が焚かれている。宮座の神主が烏帽子、白直垂、白袴、白足袋で鈴を手に、四方を拝して大太鼓、太鼓、小鼓、笛、手拍子の囃子で舞う。また病気の平癒などを祈って、その願をかなえられた者が米八升を納めて願濟（願はどき）の田楽を奉納するのが「願濟」である。また昔、神社の鳥居の近くに住んでいた孫太郎という人が金を納めて末代まで舞ってくれと頼んだので、その約束を守って毎年舞っている。これが「村うけ」である。

宵宮は夜間に執行されるので、神社の拝殿の正面・樂舎の前に斎灯が焚かれる。中心に木の皮をはがさない二股の栗の木を立てる。その一部を地下に埋め盛り土をし、その周囲に氏子の各家から持ち寄った青柴を積み重ね火をつける。火は煌々と燃えさかり、人々を神秘の世界にひき入れる。

神事舞を通観すると、「いど」は露払いの舞、「六ぶん」は猿楽囃子で、「翁」の役に扮する者の中で謡うもので非常に古風さが感じられる。「翁」が謡

の中で宝敷えをするという形式は愛知、静岡、長野の三県の県境に近い山間部に今でも伝承されている各種の「霜月神楽」の中の「翁」と同様のもので、これもまたよく古風を残している。「冠者」、「父の尉」も古い猿楽のおもかげを示すものとして貴重である。「田楽」



「高足」も当地ならではの特色があり、特に「高足」は横木左右同じでなく、一方が長くなっており、この長い方を左足にかけ、順まわりに三、四回まわる。また次の「もどき」が高足の横木に両足をかけて乗ってトントんと跳んだ。他に見られない珍しい型である。



1981-10

No.157

【表紙】

幼い貴族の肖像

ニコラ・ド・ラルジリエール

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

青少年芸術劇場(バレエ)に同行して

…福田 一平 4

青少年への芸術啓蒙の意味

…藤田 洋 6

随想

過去の遺産、未来への遺産…伊藤 延男 8

報告

アール・ヌーヴォー期のガラスと陶磁器

…福永 重樹 10

ジャパンハウス・ギャラリーの法隆寺展

…倉田 文作 13

文化庁ニュース

文化庁の昭和57年度概算要求まとまる……………15

第15回現代美術選抜展……………17

昭和56年度都道府県宗教法人事務担当職員

研修会の開催……………17

昭和56年度文化庁派遣芸術家在外研修員を決定

……………18

昭和56年度(第36回)芸術祭協賛公演決まる………21

展覧会

正倉院宝物 24

エミール・ノルデ展 25

瓦 経 26

モーリス・ドニ展 27

国語シリーズ⑥ 「漢字の読み」に関する問題 29

新設法人紹介

(財)美術文化振興協会 ……………23

(財)日本舞台芸術振興会

祭礼歳時記シリーズ⑩ 28 国立劇場ニュース 31

日本人の古くから信仰の一つとして「湯立て(ゆたて)」がある。「湯立て」とは、大釜を神前に据え、この釜に神聖な水を入れ火を焚き、この熱湯の中に巫女が笹の小枝を束ねたものを浸して取り出し、左右に振って、湯のしぶきを浴びて神が、右の状態となり、託宣を述べることである。「間い湯」という所もある。また、神に神聖な熱湯をたてまつるとともに、神聖な熱湯のしぶきを身体にかけることにより、身体についている穢れをはらうことができるとも考えた。一種の祓いである。

祭礼歳時記シリーズ⑬ 十一月の祭り

花祭り

榎本 由喜雄

(文化庁主任文化財調査官)

この湯立ては、現在でも広く伝承されており、神奈川県鎌倉市を中心とする鎌倉神楽、秋田県平鹿郡大森町八沢木保呂羽山とその周辺に伝承される霜月神楽、静岡県、愛知県、長野県の三県が県境を接する地帯に伝承される遠山祭り、冬祭り、花祭り、霜月祭りなどと呼ばれる民俗芸能や民間行事は特に著名である。これらの湯立てはもと伊勢神宮の外宮の神楽師達が、天下泰平、国土安穩、五穀豊穡を祈願して執行したものが地方に移し伝えられ、地方化して独自の形を持つようになったものである。

花祭りは「花祭り」といっても四月八日の釈迦の降誕を祝う仏生会、灌仏会とは全然異質のものである。現在では主に愛知県北設楽郡の東栄町に十一か所、同豊根村に五か所、同津具村に一か所、計十七か所に伝承されている。「花祭り」は「霜月神楽(旧暦の十一月に昔は執行した)」、「湯立神楽」、「花神楽」などともいわれ、「花祭り」を執行するムラムラの人々は、これを昔から単に「ハナ」ともいっている。毎年十一月二十二日に東栄町月で、

である。

花祭りは「花祭り」といっても四月八日の釈迦の降誕を祝う仏生会、灌仏会とは全然異質のものである。現在では主に愛知県北設楽郡の東栄町に十一か所、同豊根村に五か所、同津具村に一か所、計十七か所に伝承されている。「花祭り」は「霜月神楽(旧暦の十一月に昔は執行した)」、「湯立神楽」、「花神楽」などともいわれ、「花祭り」を執行するムラムラの人々は、これを昔から単に「ハナ」ともいっている。毎年十一月二十二日に東栄町月で、

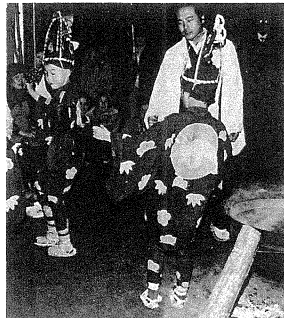
つづいて十二か月から翌年の正月にかけて東栄町、津具村、豊根村でつぎつぎに行われる。

舞を舞う場所を舞庭といひ、四隅に青竹、榊をそえて、七五三縄をはる。中央に大釜を置き湯をたぎらせる。大釜の土方に湯蓋、ビヤツケといわれる飾物をつるす。これから四方の青竹へ千道、百綱(東方は青色、南方は赤色、西方は白色、北方は黒色)をはり、神道という黄色の紙を神座からビヤツケへはる。この他にも梵天・切飾り等の飾りものがある。舞庭に面した部分に

「いろり」を中心として七五三縄をはり、ザゼチを飾り神座とする。こゝに太鼓を据え、花太夫、宮人、離子方、村人(男子)が座る。神座は花祭りの最高の神が居られる場所と考えられ、神聖な場所とされている。神事の大部分はこゝで行われ、舞が始まると、離子方の座となる。無論女人禁制の場所である。この他に「神部屋(神おろし)しずめが行われる場所、花祭りに使用する面が祭られ、舞人はこゝで身仕度して出入りする。神聖な場所である。」「氏神仮宮(舞庭に面した場所ので、屋根、壁を桧の生葉で覆う。」「あま(八百万神を勧請する場所、供物を供える。)などがある。

花祭りには多くの神事があり、「花太夫」と「宮人」が執行する。「花太夫、宮人はいわゆる神職ではない。主な神事には滝を祓い、祭り、その水を「清め水」、「湯立ての水」とする「滝ばらい」、天や山からの諸霊を祭り、悪霊を防ぐ「高根祭り」、氏神の勧請、地上の諸霊を祭り、悪霊を防ぐ「辻固め」、さらに「神入り」、「神座渡り」、「天の祭り」、「しめおろし」、「さるめの王子」、「釜祓い」、「湯立て」、「そうかいむかい」、「がくの舞」撥の舞ともいう、「どうごばやし」、「四季ばやし」、「さるごばやし」、「御神楽」などがあり、いよいよ正式の舞が始まる。青年が扇に鈴、榊、笹などを持って舞う「市の舞」、青年二人による「地固めの舞」、少年による「花の舞」、鬼面をつけた「山見鬼」、「榊鬼」で大きな鉦を打ち振る舞・特

に山見鬼の山を割り、生れ清まりの舞と榊鬼の反問、問答は特に重要である。舞い子三人による「三ッ舞」、四人による「四ッ舞」、面型の舞である「ひのねぎ」、「おちりはらさら」に翁の舞、いよいよ祭りは最高潮に達し、舞い子四人による「湯ばやし」となる荒縄を纏のかわりに十文字にかけ、釜の中の熱湯に「湯たぶさ」を浸し、これを四方に振りかけながら軽快に、また勇壮に舞う。「朝鬼」、「獅子の舞」と続く。舞が終了すると花太夫と宮人による「神事」が始まる。



「ビヤツケ」を降す「ひいなおろし」、神座、神部屋、舞庭を祓う「げどうがり」、神送りである「こくう祭」、花祭りの中で非常に重要視されている神々の心を鎮め、悪霊を鎮める「しずめ」があり、花太夫が祭文を唱え、関係者はその間、釜の周りを廻る。終ると氏神の神輿を先頭に一同が神社に向う「宮渡り」で花祭りは終了する。夜どおしの長い祭りである。なお、花祭りは昭和五十一年国の重要無形民俗文化財に指定された。



1981-11

No.158

【表紙】

母と子
エミール＝オーギュスト・
カロリュス＝デュラン
解説は29ページ
題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

常用漢字表に関する内閣告示等の
制定について … 室屋 晃 4

文化財建造物保存技術協会発足10周年
を迎えて … 日名子元雄 7

随 想

通用字体ということ … 林 大 10

資 料 常用漢字表に関する内閣告示等 13

- (1) 常用漢字表
- (2) 「常用漢字表」の実施について
- (3) 公用文における漢字使用について
- (4) 「公用文における漢字使用等について」
の具体的な取扱い方針について

文化庁ニュース

- 重要文化財旧山内家下屋敷長屋竣工…………… 17
- 大盛況の第5回日本民謡まつり…………… 18
- 昭和56年度文化財建造物修理主任技術者
講習会（上級）終る…………… 19

群馬県の著作権講習について … 一場 貞 21

千葉県における美術館解説ボランティア
育成の実践研究報告 …… 米田 耕司 23

展 覧 会 「1960年代—現代美術の転換期」展 20

国語シリーズ⑦ 「漢字の読み」に関する問題 28

新設法人紹介 （社）亜細亜美術交友会…………… 27

祭礼歳時記シリーズ①⑨ 26 国立劇場ニュース 29

飯田八幡神社の祭り

榎本 由喜雄

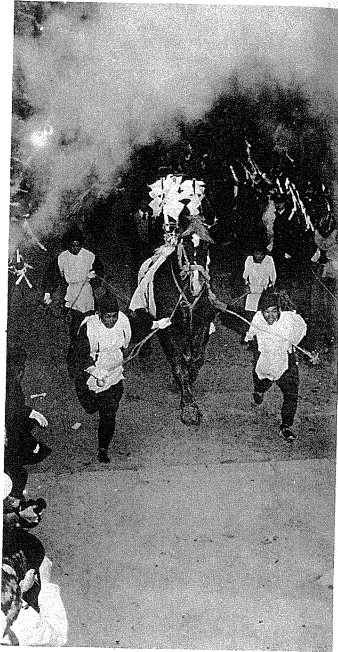
(文化庁主任文化財調査官)

埼玉県秩父郡小鹿野町飯田に鎮座する飯田八幡神社では、毎年十二月十四日、十五日に祭りが執行される。当社所蔵の文化十三年（一一八六）の文書、や同時期の「新篇武蔵風土記稿」、また明治九年の地誌武蔵国郡村誌のいずれにも当社の祭りを十一月十五日と記している。明治に入り、太陽暦の採用で、月遅れで執行するようになり、以後ずっと十二月十五日に休むことなく毎年続けられ、特に第二次世界大戦中は灯火管制をしながらも、祭りを執行したそうである（明治三十八年、日露戦争のときだけ歌舞伎芝居の上演等を休んだとのこと）。

後述のように飯田八幡神社の祭りは鉄砲を打つことがこの祭りの重要な要素となっているので、俗にこの祭りを

「鉄砲祭り」とも呼んでいて、秩父地方では秩父市の「秩父の夜祭り」、両神村の「薬師様の祭り」とともに「秩父の三マチ」「マチ」は祭りのこと。といわれ、人々の心のふるさととなっている。このため当地から他の地方へ嫁に行った人、出かせぎに行っている人、故郷を後に、他郷で生活している人、いずれも生れ故郷の祭りがなつかしく、祭りの日には小鹿野町飯田へ帰ってくる。「盆、正月よりも八幡様の祭りを楽しみに里帰りした。」という婦人達の言葉はよく当社の祭りと氏子の人々との深い関係を示している。

埼玉県秩父郡小鹿野町は秩父市の東隣りに位置し、秩父郡の中でも西端で群馬県多野郡と境を接している。西武鉄道秩父線の西武秩父駅または秩父鉄



また病氣平癒を祈願して治癒した氏子は、この時刻に女性は浴衣一枚で、男性は禪一本で当社の鳥居から拝殿まで裸参りをしたが、今では見られなくなっている。午前には神社で祭典が執行され、午後、鳥居前に氏子総代を先頭に、高張提灯を持った若い衆、大名行列の鳥毛組、御徒士組、御神馬の順に整列し、神社に向かって出発する。その間、鳥毛組、御徒士組は所作を行う。拝殿へ登る石段の下には鉄砲ぶち（現在は空砲奉納者）が待機している。鳥毛組、御徒士組が石段を登るといよいよ神馬の出発である。氏子総代の合図とともに約八十丁の銃が発砲する。神馬が一頭ずつ石段を駆け登って行く。まさに祭りは最高潮である。神馬が神社に到

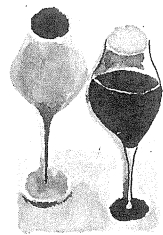
着すると、御神体を御神輿にお移し、御神幸となる。御神輿は行列を整えて御旅所の八幡淵へと進む。笠鉦・屋台もこれに続く。前述の平氏の子孫の人が大幣を持ち、御神輿をかつぐ。八幡淵で川瀬神事が執行される。終ると還幸である。神社に到着すると直会が社務所で行われ、また各宿でも直会がある。還幸後も神社下で、屋台の歌舞伎が演じられ、また神楽殿では神楽が奉納され、冬の夜は次第にふけてゆく。小鹿野町飯田の飯田八幡神社の祭り（鉄砲祭り）は上述のように一地区の祭りではあるが、いろいろな祭りの要素を持つ複雑な祭りであるとともに地区の人々と密接に関連した祭りである。

道の秩父駅で下車し、自動車に乗り、約一時間で飯田八幡神社に到着する。当地の古老の語るところによれば、昔、源平両氏の争闘の後、平氏の一族の人々が戦争に負け、播磨（兵庫県）から信濃（長野県）、上野（群馬県）と逃げ、最後に飯田に住むようになった。この人々は八幡神社の御神体を奉持してきたので、人々の生活が安定すると、御神体を飯田の赤平川の岩壁の洞穴に安置した（御神体は後に八幡神社が建てられ、此処に移された）。この地を八幡淵といい、祭りの際に川瀬神事が行われる。後に八幡神社の祭祀は平氏の一族から、八幡神社の現神職の近藤氏の祖先に依頼されたことである。この平氏の一族の子孫の人々は現在でもこの祭りで、御神輿渡御を中心に重要な役目を担っている。

祭りは一か月前の十一月十五日の祭り相談会から始まる。神社の鎮座する上郷の相談会で、全員が「行事に頼みます。」といえ、例年どおりに祭りが進められる。同十七日ごろ社務所で氏子地域全体の氏子総代会が開かれる。この祭りは祭典、神馬・大名行列と空砲発射、御神輿渡御、川瀬神事などの

神事とそれに関連する部分、笠鉦、屋台曳行、歌舞伎等のつけ祭りと呼ばれる部分とから成り立っている。十一月二十日から月末まで、町公民館の飯田支館で、祭りの当日、屋台の上で上演する歌舞伎を小鹿野歌舞伎保存会上飯田部会の人々が練習する。十二月一日は諸道具の準備と寄付金の徴集があり、さらに御神馬の準備を行う。同十一日は神社境内の清掃、看板、交通標識の点検、参道の旗幟立て、屋台の組立て、笠鉦の花づくり等を行う。いよいよ同十二日は平氏の一族の子孫の人々（播磨マケ）が祭りの準備に参加する。注連縄ない、ボンゼン（梵天）づくり、御神輿を所定の場に安置、御神馬の背に乗せるヌサづくり等がある。同十三日は地区の共同作業はなく家の清掃や祭りの料理づくりに専念する。同十四日に祭り関係者、金棒、鉢巻姿の子供、若い衆等が宮参りを行い、祭り囃子につれて笠鉦、屋台が曳行される。屋台上では三番叟が舞われる。曳行を終了すると、屋台は張り出し舞台がつくられ、歌舞伎が上演される。祭りの当日、十五日である。昔は午前零時を期して獵師が豊猟を祈願して初鉄砲をうった。

文化庁月報



1981-12

No.159

【表紙】

眠る二人の子供

ペーテル・パウル・ルーベンス

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

和魂漢才と南画 …米澤 嘉圃 4

ロンドンにおける江戸大美術展
…真保 亨 7

随想

旅の心—心の旅 …穴沢 一夫 10

報告

在米中国絵画資料調査 …鶴田 武良 13

文化庁ニュース

昭和56年度文化勲章受章者、文化功労者決定…17

昭和56年秋の褒章受章者決まる……………18

昭和56年秋の勲章受章者決まる……………18

昭和56年度宗教法人実務研修会終了、昭和57年
度開催予定県決定……………19

日本芸術院新会員の紹介……………20

昭和56年度文化財愛護全国研究集会……………22

文化振興会議の開催……………22

史跡の指定等……………23

奈良県立民俗博物館における「民俗文化財の体験
学習講座」実践研究の反省と展望…奥野義雄 26

国語シリーズ⑧ 「漢字の意味」に関する問題 29

新設公益信託紹介

公益信託内山晋米寿記念浮
世絵奨励基金……………28

祭礼歳時記シリーズ⑩ 25 国立劇場ニュース 31

東海道新幹線または東海道本線の豊橋駅で下車し、国鉄飯田線に乗り換え、北上して、温田駅か平岡駅で下車し、さらに新野行きのバスで一時間以上も乗ったと思うころ、やっと新野に到着する。徒歩で旅をしていた時代は新野は飯田街道に沿い、旅人はここを通った。道路が整備され、自動車が大いに利用される今日、愛知県北設楽郡と長野県下伊那郡との県境になっている新野峠を愛知県側から越えて下って行く一本道で新野に達する。ここ長野県

は大正月^{おとしげ}といい、公式の儀式が多いのに対し、小正月は生活に即した民俗行事が多い。小正月は正月の満月の夜である。古くは月の満ち欠けで月日を定めていた。あるいは小正月が一年の境目であったかも知れない。このときに新しい年の多幸を予祝したのである。この祭りは「田楽祭り」、「御神事」などと呼ばれていたが、大正末から「雪祭り」といわれるようになった。祭りの沿革はつきりしないが、応永の頃、新野に十一面観音を本尊とす

祭礼歳時記シリーズ^{②⑩} 一月の祭り

雪祭り

榎本 由喜雄
(文化庁主任文化財調査官)

下伊那郡阿南町新野で毎年一月十四日から十五日にかけて、夜を徹して「雪祭り」が執り行われる。

「雪祭り」といっても、北海道の「雪祭り」とは全然違う。新野の「雪祭り」は、雪を豊年の吉兆と見て、神前に供え、各種の古風な神事芸能を演じて、その年の豊作を祈願する祭りである。歴史は古い。

祭りはもと旧暦の一月十四日、同十五日に行われていた。旧暦の一月十五日は小正月^{こしょう}といい、年頭を朔正月^{しつげつ}また

はじめて祭りに奉仕する奇数年齢の「後立」^{おしろし}、氏子の中の少女で、その年はじめて祭りに奉仕する奇数年齢の「市子」^{いちこ}があり、各自、特定の役を勤める。

祭りはまず元旦に伊豆神社の門をたく「門開式」で始まる。十一日には祭りに用いる面などの祭具用具を伊豆神社から伊東家(旧神主家、ただし現在では諏訪神社)へ移す「お面おろし」、十二日に祭りに用いる用具の手入れをする「笠張り」、十三日は祭り関係者の観ぎである「お滝入り」、「役ぎめ」、面の彩色などを行う。現在ではこれらすべての行事を十三日に行っている。

いよいよ十四日である。午後、諏訪神社から御神幸は伊豆神社へ向う。これは伊東氏が神霊を奉じて伊豆神社へ向う意である。こうして伊豆神社では境内に正月の門松などを集めて作った大松明を立て、その照明で徹夜で翌朝まで祭りが続けられる。神楽殿の儀として、夕方から笛、太鼓の囃子で八人が陣形を種々にかえる「びんざさらの舞」^{びんざさらのまい}、田楽躍^{でんがくだつ}、二人の舞人が相対し扇子をとりかえて舞う「うんまい」、後立・市子が扇を手に三拝「御万歳楽」と唱える「万歳楽」、神おろしの祭文を唱える「神おろし」、関係者一同が順に出て舞う「順の舞」があり、本殿の開扉と同時に、本殿裏山のガラン様の祠でも「神おろし」順の舞がある。夜に入る



後、「御幣^{みひ}いたゞき」、「神おろし」、「中啓の舞」^{なかけのまい}、一人ずつ中啓を捧持し舞うがあり、その後、境内末社を参拝する「御参宮」がある。夜半になると庭能といわれる庭の儀となる。大松明の下、種々の仮面の舞である。赤頭巾、わらの冠、草鞋で団扇と松を持ち舞う「さいほう」、これのくずしである「もとき」、立烏帽子で馬の形の作りものを腰につけ舞いながら矢を射る「競馬^{けいば}」、神主が牛の作りものを腰につけ舞い、矢を射る「牛」、翁とそのもときである「松かげ」、「しょうじつきり」、禰宜の舞である「海道下り」、かまけわぎのある「神婆」、鬼が禰宜に負ける「天狗」、悪霊を鎮める「八幡」、「しずめ」、一種の茶番狂言である「鍛冶」、最後に大松明の横に新鷹を敷き、太鼓を置き、その上に稲束をのせ、神主、内輪衆が田遊びの歌を唱え、豊作を祈る「田遊び」で終了する。昭和五十二年、重要無形民俗文化財に指定された。



1982-1

No.160

【表紙】

宿屋の前の旅人たち
イサーク・ファン・オスターゼ

解説は27ページ

題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

冷泉家の文化財 坂本 太郎 4

特別展「正倉院宝物」を顧みて
... 濱田 隆 6

随 想

仲直りのすすめ 小林 善彦 8

報 告

ケルン・ベルリン・チューリヒ
... 金沢 弘 10

文化庁ニュース

昭和56年度(第36回)芸術祭芸術祭大賞・
同優秀賞決まる.....13
第6期著作権審議会発足.....15
第28回文化財防火デー.....15
重要文化財(建造物)の新指定.....16
重要伝統的建造物群保存地区の新選定.....18
北大第二農場建造物の保存修理終る.....18
文化庁企画・提供
「美をもとめて」の2月の放送予定.....20

〔展覧会〕特別展 現代の食器——注ぐ.....21
アジアの心をむすぶ28
英文「MOMBUSHO」を刊行30
我が県の文化行政——徳島県の文化行政——
豊かな地域文化の振興をめざして
... 川人 幸夫 22

国語シリーズ⑨ 「漢字の意味」に関する問題 26

新設法人紹介 (財)全日本菊花連盟.....19

祭礼歳時記シリーズ⑳ 25 国立劇場ニュース 31

日本人の昔からの信仰の一つとして「田遊び」がある。「田遊び」とは、年のはじめに種蒔きから収穫までの農耕行事を歌や表徴的なしぐさで演じ、最後にこのように豊年万作であると神に示す。神はこれを見て豊年にしなければならぬと思ひ尽力してくれ、その結果、豊年万作になると考えていた。これは神が感染呪術により豊作にしてくれるのであると思われていた。この「田遊び」は、全国的に非常に多い。たとえば東京都板橋区の徳丸や赤塚の田遊び、岐阜県益田郡下呂町森の田の神祭、

祭礼歳時記シリーズ②1 二月の祭り

えんぶり

榎本 由喜雄

(文化庁主任文化財調査官)

和歌山県伊都郡花園村梁瀬の御田舞、高知県室戸市吉良川町の御田祭などその典型的なものである。

この「田遊び」が風流を取り入れ、さらに舞踊化したものが「田植踊」で東北地方に多い。たとえば岩手県紫波郡紫波町山屋・宮城県名取郡秋保町の田植踊などである。八戸の「えんぶり」も田植踊の一つだが、他の地方の田植踊とは様式、内容ともや、異なる。

八戸の「えんぶり」は青森県八戸市および隣接の三戸郡に伝承されているもので、毎年二月十七日の早朝、八戸

市の長者山に「えんぶり」の各組が集合し、新羅神社に祈願の後「えんぶり」を奉納、つづいて三八城（みやぎ）神社に行き、再び社前で「えんぶり」を奉納した後、市内の各家々を訪れて祝ぎ人となり、家の前で踊り、さらには座敷によばれて地狂言や手踊りなど演じたり、またこの家を宿として縁故者や取引先などに二十日まで門打ちをする。

「えんぶり」はもともと小正月の行事であったが、暦日の改正により、月遅れの小正月に行っていたが、明治にな

つてから二月十七日の祈年祭にならつて、新暦の二月十七日から四日間ほど八戸の町で行われている。明治のころには「えんぶり」組が百組を越えるほどであったが、今では組の数は少なくなっている。

「えんぶり」組は、一組のうち馬の頭をかたどった鳥帽子を冠った三〜四人の鳥帽子太夫が組の中心となる。三人の場合、先頭を藤九郎、次が中太夫または中、終りが後の太夫または「くらどめ」などと呼ぶ。「えんぶり」一組は鳥帽子太夫を中心にして、一組二〇人

から三十人ぐらいで、大黒舞やえびす舞などの囃子舞の組、えんこえんことと呼ばれる可愛い子供達の踊り手、太鼓、笛、鉦、三味線、歌い手、旗持ち、世話役などで一団が結成されている。太夫の冠っている鳥帽子には鶴亀、宝づくし、田植、夷大黒、田の代掻きなどの絵が金・銀・朱の泥墨で美しくえがかれている。

「えんぶり」には「長えんぶり」という「えんぶり」とがある。長えんぶりの藤九郎は鳥帽子に牡丹の花がつく。また、どうさいえんぶりでは太夫のすべてが、前髪と呼ばれる五色の紙のふさをつけている。鳥帽子は農耕のために絶対にかかすことのできなかつた馬の形を表徴したものである。この鳥帽子の立髪に田の神さまがお下りになると考えられている。

太夫は右手に「えんぶり」、「えんぶり」などと呼ばれるものを持ち、左手に扇子、手拭などを持つ。ハッピか股引、ハバキ、ツマゴ（襪靴）という姿で歌と囃子に合せて「えんぶり」を踊る。「えんぶり」とは田植への前に田を水平にならすために使う用具で、長い柄がつき、その先端に長方形の板をつけた農耕用具で、これをかたどったものである。これには鳴輪がついている。

「えんぶり」の一団が来ると、まず、えんぶり初めの口上をいう。「えんぶり」の藤九郎は参りました。……と、い、太夫がえんぶりを手にして大地を摺るようにして踊る。これを「えん

ぶりを摺る」という。これは太夫の鳥帽子に下った田の神様が、えんぶりを摺ることによって自分の霊を田の中に込め、その力が、秋の稔りを豊作にしてくれると考えられている。

藤九郎の口上が終ると、「摺り初め」つづいて「松の舞」、「中の摺」があり、「えんこえんこ」という子供の舞がある。



次が「御祝」「馬方節」、「恵比寿舞」、そして「摺り納め」である。

終って藤九郎を先に出る。初めと終りに太夫が囃子や鉦台を振って左の手を顔の前上げる「見参」というお辞儀をして終る。

「えんぶり」は昭和五十四年二月三日に国の重要無形民俗文化財に指定された。



1982-3

No. 162

【表紙】

あひるの子

ジョン・エヴァリット・ミレイ

解説は29ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

飛鳥水落遺跡の調査

…狩野 久 4

地方美術館の課題

…財津 永次 7

随想

舞踊界の現況に想う

…江口 博 10

北海道大学農学部第二農場

の保存修理を終わって…五味 盛重 12

報告

中国の漆見聞記

…見城 敏子 16

著作権政府間委員会等に出席して

…大山 幸房 18

文化庁ニュース

藤井久仁江氏らに芸術祭大賞……………21

昭和56年度包括宗教法人等管理者研究協議会
(東京会場)開催さる……………21

昭和57年度宗務課関係事業計画の概要……………22

昭和56年度地方文化施設職員研修会の開催……………23

展覧会

東山魁夷展……………24

釈迦信迎と清涼寺展……………25

ザオ・ウーキー展……………26

国語シリーズ⑪ 「漢字の表記」に関する問題 28

新設法人紹介 (社)日本新工芸家連盟……………30

祭礼歳時記シリーズ②② 27 国立劇場ニュース 30

仏教の諸行事も広い意味での「まつり」であるので、仏教関係の諸行事の中で著名な「壬生大念仏」について考えてみよう。

壬生大念仏は京都市中京区仏光寺坊城上るに建立されている壬生寺の大念仏会に修されるもので、壬生狂言、ガンドンテンなどともいわれる。

寺伝によると、正安二年（一三〇〇）壬生寺の中興の僧、円覚上人が融通念

言堂（大念仏堂）で毎日、数番ずつの狂言が演じられる。（節分の日と秋の連休の日にも上演される。）

舞台は三間四方の舞台に橋懸りがある。大念仏会の結願日に演じる「湯立」以外はセリフを用いず、すべて黙劇である。囃子には笛、太鼓、鯛口を用い、その音がガンドンテンと聞えて来る。この旋律にのるようにして登場人物はゆるやかに、のびのびとした演技をし

祭礼歳時記シリーズ²²

四月の祭り 壬生大念仏

榎本 由喜雄

（文化庁主任文化財調査官）

仏を修し、その念仏の意味を大衆にわ

かり易く説明するために仕組んだのがその始まりであるといっている。これが一般の人々の心に通じ、寛政二年、文化十一年、天保十一年には、江戸の葺屋町川岸、深川八幡境内、赤坂氷川明神社地、芝神明社地、浅草寺境内でも特別に演じている。

現在では四月二十一日から同二十九日までの大念仏会の期間中、同寺の狂

てゆく。

演目は現在三十番が伝承されており、その中には壬生狂言独得のもの——桶取、山花とろろ、餓鬼角力など——や、能・狂言から題材をとったもの——紅葉狩、安達原、大江山、羅生門、大仏供養、夜討曾我、橋弁慶、道成寺、土蜘蛛など——がある。特に大念仏会執行中は毎日狂言の最初に「炮烙割」を演じ、その最後に、当年の節分に参詣

者が厄除け祈禱に奉納した炮烙を割るしきたりがある。また、大念仏会の最終日の最後から二番目には必ず「湯立」を演じ、厄落し、追善供養、万民安樂の祈願が成就されたことを喜び、さらに講の代表者が湯立の釜をかつき、「明年の、明年の」とにぎやかに踊りながら引き上げる。さらに最終日の最後に「棒振」が演じられる。棒振が舞台中央で仏の種子を踏む作法をし、五色の房をつけた棒を両手、片手で上下左右に振りまわす。講員の人々が扇子でおおきながら「チョウハ、サツサイ」とはやす。最後に全員で「打ちましょ」チヨンチヨンと打ち納めて終了する。

壬生狂言の代表曲といわれる「桶取」は最も重要視され、演技もむずかしいものとされている。その筋は、壬生寺の近くに住んでいた照子という美女は生れながらに左手の指が三本しかなかった。これを前世の因縁とあきらめ、毎日、寺の近くの尼が池の水を桶に汲んで、壬生寺に参詣し、仏前に水を供え、来世こそは五体満足の人として生まれてこられるよう仏に祈願していた。その頃、和氣俊清という金持が壬生寺の近くに住み、寺に参詣し、この照子を見染めてしまう。いろいろとくだいた末に、馴染んでしまう。和氣俊清の妻はちやうど懷妊中で、これを知り、嫉妬に狂い、怒りがこみ上げ、化粧を

するが、衰えた容貌はなすすべもない。和氣俊清と照子の二人が馴染んでいる所に駆け込み、夫の不実を訴えるが、妻を残して、俊清と照子は手に手をとって逃げて行く。すっかり絶望してしまつた妻は狂死してしまう。このことを知った二人は前非を悔い、仏門に帰



依する。壬生狂言では妻が狂う所で終っている。照子の踊りには「つかみ」「投げ」「燕がえし」の舞踊の型がある。壬生狂言はわが国の芸能史上重要な地位を占めるものである。昭和五十一年、国の重要無形民俗文化財に指定された。